

特 71

653

明治廿六年十二月

千島艦事件

報
知
社

301084-000-1

特71-653

千島艦事件

福良虎雄 / 編

M26.12

BEA-0021

HEINHEIM

特71
653

千島艦事件

記載要目

橫濱英國領事廳裁判錄并ニ判決	三
上海英國上等裁判所判決	十六
鳩山和夫氏ノ演說	三十三
鳩山氏等ヨリ政府へ提出セシ質問書	五十五
議院ニ於ケル鳩山氏ノ答辯催促演說	五十六
政府ノ答辯書	六十二
鳩山氏等ノ再質問書	六十三
再質問書提出ノ理由説明	六十四
長谷場純孝氏ノ緊急動議	七十一
政府ノ覆牒	七十一
上奏案文	七十三

頁數



78W33055

千島艦事件

鬱乎タル山岳、蒼々トシテ長ニ色アリ、洋々タル河海、激澗トシテ常ニ明ニ、五風十雨、寒ナラス暑ナラス、榮穀豐穰、和氣瀟然タルモノ、此ヲ神洲ノ國土トス、德アリ義アリ、智アリ能アリ忠勇武烈猛ニシテ寛、弱ヲ凌カス強ヲ恐レズ、卓然トシテ獨歩スルモノ、此ヲ大日本臣民トス、然リ而シテ之ヲ統御ノ主權ヲ掌握スルモノ、抑モ誰ソヤ曰ク萬世一系千古不易允武ニシテ允文ナル上ニ御一人ノ至尊ナリ、國ヲ建ツル茲ニ三千年ノ内曾テ大逆ノ行アル者ナク、外未タ國辱ヲ被ムラス、金甄無欲、益々國運ノ隆昌ヲ致セル我帝國ノ如キハ、天下安クニ求ムトスルモ又々決シテ得ヘカラサルナリ

然リト雖モ今ヤ之ヲ事實ニ徵スレハ則チ如何、樺太ノ一島ハ如何、訂盟條約ハ如何是豈ニ國土ト臣民ノ汚辱ダラストセムヤ况ヤ神聖ナル主權ニ侵犯ヲ被ムル如キ有ラハ我忠勇武烈ナル帝國臣民、一日モ黙止シテ已ム可カラサルナリ

彼ノ千島艦衝突損害要償ノ事タル、固ヨリ一小民事ノ争訟ノミ、然レ共之ヨリ生セル關係タル、種々難多、或ハ國土ニ消長ヲ及ホシ、又法權ノ有無ニ影響ス、就中最モ重大ノ事タルハ我神聖ナル主權ニ侵犯ヲ被ムリタルト是ナリ今ニシテ之ヲ雪カスンハ我神聖ナル主權ヲ如何、我獨立ノ國体ヲ如何、國家ニ志アル者此事ニ屬瘁セスンハ又何ヲカ爲サムヤ

天皇ノ神聖ニシテ侵シ奉ル可ラサルト瞭トシテ火ヲ賭ルヨリ明ナリ豈ニ特ニ憲法ノ明文ヲ待タムヤ固ヨリ帝國臣民タル者ノ三千年來服膺スル所ニシテ三尺ノ童子尙ホ且ツ謬ラス然ルヲ該訴訟ノ進行中長クモ御名ヲ濫用シテ外國法廷ノ審判ヲ受ケタルカ如キハ果シ

テ堂々タル帝國日本政府ノ所置ト謂フヲ得ヘキ乎、否ナ帝國ノ臣子タルモノ果シテ爲スニ忍フ所ナル乎、仮令ヒ政府自身ニ御名ヲ用キストスルモ裁判ノ進行中其代理人ノ爲ス所ニ放任シテ顧ミサリシハ是レ即チ代理人ノ行爲ヲ默許シタルノミ内閣諸公タルモノ何ノ顔色アリテカ陛下ト臣民トニ對セントスル

衆議院議員法學博士鳩山和夫氏夙ニ憤慨シ曩ニ之ヲ錦輝館ニ演說シテ大ニ輿論ヲ指導シ今又帝國議會ノ開會ヲ機トシ政府ニ對シ右ニ關スル質問ヲ試ミタルモ政府ハ冷々唯タ一片ノ文書ヲ以テ答辯シ一モ其要領ヲ得ス是ニ於テカ鳩山氏ハ更ニ再質問書ヲ提出シタリ而シテ衆議院亦起ツテ大ニ政府ノ不當ヲ尤メ議員長谷塲純孝氏ノ緊急動議ニ由リ全院一致ヲ以テ「内閣大臣ハ出院シテ口頭ノ答辯ヲナス可シ」ト議決シ直ニ之ヲ政府ニ促カシタルニ政府ハ「國務大臣ハ何時ニテモ議院ニ出席スルノ權利ヲ有スルヲ以テ故ラニ請求ヲ煩スヲ要セス」ト覆牒シテ未タ満足ノ答辯ヲ爲ス能ハス

噫乎寸刻片時モ措クニ堪エサルハ主權ノ神聖ヲ侵サレタルレナリ國體ノ毀損ヲ招キタルレナリ國體既ニ毀損ヲ招キ主權又神聖ヲ欲カハ則チ是レ主權ナキ耳、國體ナキ耳、國體ナキ主權ナキモ尙ホ忍フ可クンハ天下何事カ忍フ可カラサル況ヤ三千年來金甄無敵ノ國體ニシテ萬世一系ノ主權ヲ戴ケル忠勇武烈ノ臣民タル者ニ於テオヤ

是ヲ以テ輿論ハ益々沸騰シ人心愈々激昂シテ其ノ洗雪ニ努ムル者日ニ多キヲ加フ而シテ衆議院ハ今ヤ質問ニ慊焉タラス直ニ進テ上奏ヲ爲サムトシ貴族院亦將サニ爲ス所アラムトス是レ我輩ノ深ク喜フ所ト雖モ該件ノ關スル事情理義ニシテ未タ深ク一般人民ニ徹底セサル有ルカ如キハ實ニ遺憾ニ堪ヘサルナリ

我輩之カ事情ヲ明ニシ之カ理義ヲ通スルノ便ヲ計リ關係書類ヲ蒐輯シテ一小冊子ヲ爲シ以テ一搬人民考究ニ資セムト欲スルモノ他ナシ是レ主權ノ毀損ヲ回復シ國體ノ汚辱ヲ洗雪スルノ一端ニ供シ并セテ上ミ至尊ニ對シ奉リ下モ同胞ニ向ヒ涓滴ノ微志ヲ效サムト試ミルノミ江湖幸ニ之ヲ諒セヨ

第一

明治廿五年十一月三十日我帝國軍艦千島佛國ヨリ入朝ノ途次藝備ノ間ナル松江沖ニ於テ英國彼阿瀛船會社ノ所有船ラヴエンナ號ト衝突シ爲メニ我軍艦千島ハ沈没シ船體ヲ失ヒ乗組員ヲ殺セリ我政府ハ其曲ラヴエンナ號ノ不當航海ニアリトシ英人エロビウワルホルド及ヒ辨護士岡村輝彦氏等ヲ以テ訴訟代理人ト定メ彼阿會社ヲ相手取り八十五萬圓ノ損害要償ヲ在橫濱英國領事廳ニ起訴セリ是レ本件ノ起因ニシテ其成リ行キヲ詳悉スルハ一ニ領事廳ノ裁判錄并ニ其判決文ニ據ルヲ以テ最モ便利ト察スルヲ以テ今橫濱メー

○千八百九十三年五月廿五日開廷

判事モワット氏立合

原告帝國日本政府

被告彼阿瀛船會社

訴件千島艦、ラヴエンナ號衝突損害要償事件

此日ノ法廷ハ被告代人デヨン、フレデリツキ、ラウダーヨリ申立テタル左ノ「訴訟停止」

ノ申請ニ付キ審理スル爲メニ開カレタルナリ
被告代人ノ申立ツル所ハ左ノ如シ

日本政府ノ請求ニ付テハ當方ヨリ答辯ヲ爲スヲ要セスシテ直ニ左ノ理由ニ因テ却下アラ
ンコトヲ申請ス
當法廷ニ起訴スルニハ日本政府ト云フカ如キ漠然トシテ其誰レタルヲ知リ難キ名稱ヲ以
テスルヲ得ス
千島艦ハ日本國ノ軍艦タルコトヲ證明サレタリ因テ當法廷ニ於テハ該艦ノ所有權ハ天皇ニ
在ルコトヲ認ム

右「訴訟停止」ノ申請ハ去ル五月二十日ヲ以テ式ニ據テ申立テタルモノニシテ裁判所ハ廿
五日ヲ以テ此事ニ付テ審理スヘシト命令シタルナリ
ダンカン、マクニル氏及ヒ岡村輝彦氏ハ原告代人タリト云ヒゼー、エフ、ラウダー氏ハ
被告代人ナリト申立テタリ

判事着席スルヤ岡村氏ニ挨拶シ岡村氏亦之ニ答禮セリ
ラウダー氏ハ法廷ノ許可ヲ請フテ右「訴訟停止」ノ異議ヲ申立テタル要領ヲ述ヘタリ其要領
トスル所ハ右ノ異議ハ被告ノ爲ニ申立テタルモノニシテ原告ノ申請スル所ヲ改メテ實際ノ原
告タルヘキ人ノ代理者ヨリ請求サレンコトヲ求ムルニ在リ原告代人ハ此答辯トシテ陳述書
ヲ出シ本件ハ固ヨリ實際原告タルヘキ人ノ起訴シツアルモノニシテ唯タ帝國日本政府ノ
名稱ヲ用キタルノミト云ヘル一事ヲ答辯シ以テ被告ヲシテ満足スルニ至ラシメタリ是ニ於
テカ法廷ハ尙ホ此異議ニ關シテ審理スルノ必要ナキニ至レリ

マクニル氏曰ク余ハ一々學友ラウダー氏ノ謂フ所ニ默從ス且ツ其申立テタル異議ニ付キ最
早辯論ヲ費シテ法廷ヲ累ハスノ要ナキニ至レルコト欣喜至極ニ存ス

判事曰ク余ハ十分被告ヨリ申立テタル異議ノ原因ヲ認許セリ而シテ當事者双方亦公平ノ審
理ヲ望ミ事情ノ許ス限リハ迅速ニ處理センコトヲ欲スヘキニ付キ今ヤ公平ニ重要ナル本件ニ
從事スヘキヲ斷定ス

ラウダー氏曰ク原告ノ請求ニ答辯スル時日ハ學友マクニル氏ノ承諾ヲ得テ次週ノ日曜日若
クハ火曜日マテ延期ヲ法廷ニ願ヒタシ實ハ右異議申立テノ爲メ準備出來兼テ居ルナリ然シ
今少々ニテ出來スヘシ

原告代人等曰ク承知セリ

ラウダー氏曰ク本案ノ審理ハ勿論被告ニ於テモ成ルヘク八月前ニ急ニ開廷アラムコトヲ望ム
ト雖モ證人不在ニ付キ其間ニ來ルヲ得ルヤ否ヤ氣遣ナリ尤余ニ於テモ被告ニ於テモ成ルヘ
ク至急ニ證人ノ來ルヲ望ミ居レリ

判事曰ク勿論、成ル可ク早く一定セムコトヲ望ム
ラウダー氏曰ク本件ノ發生シテヨリ實ニ長日月ヲ經過シタリラダエンナ號モ本件ノ成行ヲ
見ント欲シテ永ラク碇泊シタルモ餘リ延引シタル爲メ立チ去リタリ而シテ其間ニ證人タル

ヘキモノ一人ハ死亡シ二人ハ證人タル資格ナキモノト爲レリマクニル氏ニ申シ置クカ以上
述ヘタル所ハ決シテ辯論ヲナシタルニ非スシテ唯タ法廷ニ公然八月以前ニハ本案審理ノ出
來難キ所以ヲ申立テ併セテ貴君ト貴君ノ友人(岡村氏ヲ指スナラム)ニ右ノ事情ヲ知ラシメ
ム爲メナリ

判事曰ク余ハ今ヤ本日審理セシ事ノ何タルヲ告ケム即チ被告ノ異議ハ落着シ被告ノ答辯期日ヲ次週火曜日ト定メタル旨一決セリ
ラウダー氏曰ク宜フゴサル
是ニ於テ閉廷セリ

○一千八百九十三年五月三十一月開廷
此日ノ法廷ハ被告ヨリ申立テタル左ノ異議ノ申請ヲ審理スル爲メニ開カレタリ
原告ハ當法廷ノ裁判管轄權ニ承服スルノ宣誓ヲ爲スコシ
然ラスンハ

原告ハ被告ノ不利益トナリ爲メニ受ク可キ利益ヲ受クルヲ得ス
トノ命令ヲ法廷ヨリ原告ニ申渡サレンヲ申請ス
是レ其異議申請ノ要領トス

エー、ビーウオルフォルド氏及ヒ岡村輝彦氏原告ヲ代表シゼー、エフ、ラウダー氏被告ヲ代表シ孰レモ出席
又日本政府法律顧問官エム、カークード氏狀師席ニ就キ彼阿會社地方代理人ゼー、リツケツト氏亦タ出廷セリ

此間双方ノ辯論アルモ之ヲ略シ直ニ右異議ノ申請ニ付領事廳判事ノ與ヘタル決定書ヲ譯シテ示サム

決定書ニ曰ク

被告申請スル所ノ異議ハ原告ニ對シテ當法廷ノ裁判管轄權ニ承服スルノ宣誓ヲ爲スカ然ラ

ズンハ訴訟進行ノ如何ナル程度ニ於テスルモ原告ハ被告ノ不利益トナリ爲メニ受クヘキ利益ヲ受クルヲ得ストノ命令ヲ下サムヲ當法廷ニ請求スルニ在リ依テ現行法規ニ按スルニ外國人タル原告人ヲシテ當法廷ノ裁判管轄權ニ承服スルノ宣誓ヲ爲サシムルニ關スル規定ハ一千八百八十六年八月三日樞密院令第二條第二項ニ見エタリ是一千八百八十一年樞密院令第四十七條第二項ニ「外國人領事廳ニ起訴スルルハ其裁判管轄權ニ承服スル宣誓ヲ爲スヘシ」ト云ヘル規定ヲ改正シタルモノナリ而シテ舊令四十七條第三項ハ新令ト相抵觸セサルモノナルガ今其規定ニ見ルニ曰ク「被告ハ裁判管轄ニ承服セル外國人タル原告ニ對シテハ反訴又ハ中間訴訟ヲ提起スルヲ得ス但シ最初ニ法廷ノ許可アルモノハ此限ニアラス」トアリ且ツ之ヲ一千八百八十六年樞密院令ニモ亦適用スルヲ得ヘキ一千八百八十一年樞密院令解釋條款第三條ニ見ルニ院令ニ所謂「外國人」トハ支那皇帝、又ハ日本天皇ノ臣民其他女皇陛下ト親好アル國ノ臣民ヲ指示ストアリ今マ本件ニ於テ原告ハ帝國日本政府ト叙述サル、モ曩ニ提供サレタル陳述書ニ據レハ其名稱タルヤ適當ニ千島艦ノ所有主トシテ之カ損害要償ヲ訴ヘタル日本皇帝陛下ヲ指示シタルニ外ナラス尙ホ又タ陳述書ノ謂フ所ヲ以テスレハ「日本皇帝陛下ハ一千八百七十八年ニ於テ其御名ヲ以テ當法廷ニ一訴訟ヲ起スヲ許可サレタリ」トアリ是ニ由テ此ヲ觀レハ當該原告タルモノハ日本天皇御自身タリ而シテ天皇陛下ノ一千八百八十六年樞密院令第二條第二項ノ解釋タル解釋條款中謂ユル「外國人」ニ非サルコト亦明晰ナリ是ヲ以テ本件ノ場合ニ於テハ裁判管轄權ニ承服スルノ宣誓ヲ爲サシムルノ要ナシ

(中略)

○千八百九十三年六月十二日開廷

原告代理人エー、ビー、ワルホルド氏岡村輝彦氏モンテギユウ、カークード氏出廷

被告代理人ジエー、エフ、ラウダー氏出廷

ラウダー氏曰ク被告ハ第一本訴ニ於テ原告ニ對シテ十萬弗ノ請求ヲ反訴トシテ提出スルノ許可ヲ受クル爲メニ茲ニ申請ス第二本訴ト反訴ノ合併審理ヲ求ム第三反訴ニ就テ當裁判所ノ判決ヲ執行スル爲メニ必要ナル保證ヲナスコトヲ原告ニ命セラレシコトヲ求ム

ラウダー氏辯論ノ摘要
被告ガ反訴ヲ提起スルハ訴訟手續第五十五條ニ據ルモノニシテ即チ第五十五條ニハ左ノ明文アリ

被告ガ答辯トシテ一ノ防禦方法ヲ提出シタル場合ニ於テ其防禦方法ヲ以テ有効ナリトセバ本案ニ關シ原告ニ對シテ救正ヲ求ムルコトヲ得ル場合ナル時ハ裁判所ハ申立ニ依リ口頭辯論ニ際シ又ハ其以前ニ於テ反訴トシテ之ヲ提出スルノ許可ヲ與フルコトヲ得云々
被告ノ第一ノ請求ハ反訴ヲ提起スルニ就キ當裁判所ノ許可ヲ得ントスルモノニシテ當裁判所ニ於テ此許可ヲ與フルコトヲ得ルハ明瞭ニシテ既ニクラリサ、ビー、カーバ對グラモীগンシヤイヤノ先例モアリ（ワルホルド氏曰ク該件ハ千八百八十一年ノ樞密院令ニ基キ反訴ヲ許シタルモノナリ而シテ原告ハ管轄權ニ服從シタリシナリ）即チ千八百六十五年並ニ千八百八十一年ノ樞密院令ニ據リテ反訴ヲ提起シタルモノナリ原告ハ英國人ニ非ス外國人ナリキ而テ裁判所ハ反訴ヲ許シタリ對手人ハ該件ト本件トハ同一ノ場合ニ非スト抗辯スルナラム然レモ原告ハ任意ニ當裁判所ヲ喚起シタルカ故ニ即チ任意ニ其管轄權ヲ承認シタルモノナリ

ノナリ

第二第三ノ請求ニ關スル辯論ハ略ス

判事曰ク本官ハ是ヨリ進行スル前ニ被告代理人ニ注意シタキ點アリ即チ本官ハ第一ニ被告ノ請求スル如キ許可ヲ與フル爲メノ決定ヲナスノ權ヲ有スルヤ又本官ハ夫レニ關シテ裁判管轄權ヲ有スルヤ否ヤノ點ナリ若シ條約ナカリセバ此訴訟ハ日本ノ裁判所ニ於テ提起セラ

ル、筋ニ非スヤ

ラウダー氏曰ク其通りナラント思考ス

判事曰ク然ラバ其訴訟ニ於テ被告ガ反訴ヲ爲サントスルモ（陳述書ニアル如ク天皇ハ神聖ニシテ侵ス可ラス云々）日本ノ法律ニ於テハ之ヲ許サル可シ

ラウダー氏曰ク或ハ然ラン

判事曰ク本官ハ如何ナル裁判權ヲ行フモノナルヤ若シ條約ナカリセバ當然日本裁判所ニ屬スベキ裁判權ノ一部ヲ行フモノニ非スヤ

ラウダー氏曰ク然リ予モ左様ニ存スルナリ

判事曰ク條約ニ依テ與ヘラレタル裁判權ノ外本官ニ於テ行フ能ハザルモノトセバ本官ハ日本裁判ヨリ廣濶ナル裁判權ヲ行フ能ハサルノ理ナラスヤ

ラウダー氏閣下ガ條約ニ反シテ裁判權ヲ行フヲ得ルヤ否ヤハ予ノ知ル所ニ非ズ然レモ閣下ハ條約ニ基キタル樞密院令ヲ遵奉シ其樞密院令ガ裁判所ニ附與スル所ノ裁判權ヲ行ハサル可ラサルモノト信ス而テ開ハ日本法律ニ關係ナシ

判事曰ク當裁判所ハ條約ナカリセバ當然日本裁判所ニ屬スベキ裁判權ヲ條約ニ據リテ行フ

モノナリ而テ茲ニ決スベキ問題ハ裁判權ニ關スル樞密院令ノ規定ノ範圍ナリトス
ラウダー氏ハ裁判所ハ樞密院令ノ當否ヲ論スルノ權能ヲ有セストシタイ、ワン、ウオー對ア
ダムベル商會ノ件ヲ引用セリ

茲ニ於テワルホルド氏辯論シテ曰ク手續第五十五條ニ於テハ防禦方法其モノガ原告ニ對シ
テ救正權ヲ生スルモノナルコトヲ規定セリ故ニ防禦方法ニシテ裁判管轄權以外ノ事柄ニ基
クモノナルハ是レ救正權ヲ發生セザルモノナリ予輩ノ主張ハ手續第五十五條ハ第一日本人
ニ對シテハ無効ナリ第二當裁判所ニ來ル所ノ外國人ニ對シテハ無効ナリト云フニ在リ日本
人ニ關シテハ樞密院令並ニ訴訟手續トモニ日英條約ニ牴觸セザルモノニ限り有効ナリ而シ
テ一般外國人ニ關シテハ第五十五條ノ反訴ヲ許スベキ場合ハ外國人ニ於テ先ツ裁判管轄權
ヲ承認シタル片ノミニ限ルモノナリ(ワルホルド氏ハラコニヤノ件ヲ引用セリ)

予輩ノ訴ヘノ原因ハラベンナ號乘組員ノ過失ナリ被告ノ原因ナルモノハ日本領海ニ於ケル
軍艦千島號乘組員ノ過失ナリ而テ是レ當裁判所ノ管轄權以外ニ在ルモノナリ裁判所ノ管轄
權ハ條約ニ基クモノニシテ條約ハ英國人ノ義務ヲ判定スルノ權ヲ當裁判所ニ與フルモ其權
利ヲ定ムルノ權ハ與ヘサルナリ日本人ノ義務ヲ判定スルハ日本裁判所ニ屬スルノ權限ニシ
テ當裁判所ハ日本人カ職務上過失アリシヤ否ヤヲ判定スルノ權ナシ若シ本案衝突ノ場所ニ
シテ英領ナリシカ又ハ本訴ニシテ英國ニ於テ提起セラレタルナラバ反訴ノ許スベキハ勿論
ナルトシ條約上當裁判所ニ於テ訴訟ヲ提起スベカラザル以上ハ反訴ノ名義ヲ以テスルモ其
不當ナルコト論ヲ俟ザルナリ(中略)、
當裁判所ガ

天皇ニ對シテ裁判權ヲ行フ能ハサルコトハ實ニ明瞭ナル可シ

天皇ハ當裁判所ニ於テ

天皇特權ヲ有ストセハ(予ハ

天皇カ此特權ヲ有スルコトヲ主張ス)

裁判所ハ「君主ハ非行ヲ爲ス能ハス」トノ法理ヲ適用セザル可ラス(アサルノ件參照)而テ當
裁判所ニ於テハ原告ヲ以テ所謂君主トシテ視ザルモノトスルモ尙反訴ヲ許ス可ラストナス
一ノ證據アリ即チ非行ノアリタル土地ノ法律即チ日本ノ法律ヲ適用セザル可ラスト云フコ
ト是ナリ被告ハ日本領海ニ於テ日本國ニ屬スル日本船ニ於ケル非行ナルモノヲ以テ防禦ノ
方法トナスモノナルカ故ニ即チ日本ノ法律ヲ適用セザル可ラス而シテ日本法律ニ於テハ陳
述書ニ明記スル如ク
日本ノ天皇ハ非行ヲ爲ス能ハス
陛下ハ神聖ニシテ侵ス可ラス
陛下ノ臣僚ノ非行又ハ過失ニ原因セル損害ニ就キ
御一身ニ對シテハ勿論代理ノ方法ニ於テモ
陛下ニ對シテ訴ヘテ起スコトヲ得ザルモノナリ日本法律既ニ斯ノ如クナル以上ハ
天皇ニ對シテ衝突ニ原因スル訴ヘテ提起スルノ不當ナルコト明瞭ナルベシ而テ私犯ニ就テ
ハ其事柄ノ起リタル場所ノ法律ヲ適用スベキコトハモツクサム事件ヲ以テ之ヲ證スルニ足
ル

茲ニ於テ衝突ノ場所カ日本領海ナルヤ否ニ關シ當事者代理人ノ申立一定セス双方ヨリ海圖

ヲ差出シタリ

(中畧)

○千八百九十三年六月二十日開廷

原告代理人エー、ビー、ワルホルド氏岡村輝彦氏出廷

被告代理人ビー、エフ、ラウダー氏出廷

判事ハ判決ノ延滞シタルヲ謝シ又是レ甚タ重要ノ事件ナルカ故ニ已ムヲ得サルヲナリト述
ヘテ被告ヨリ願ヒ出テタル反訴ニ付キ直ニ左ノ判決ヲ與ヘタリ

被告ハ原告タル日本政府即チ日本天皇ヨリ昨年十一月卅日日本内海ニ於テ巡洋艦千嶋ト
被告ノ所有漁船ラヴェンナ號トノ衝突ニ因テ生シタル損害ノ要求ニ對シ反訴ヲ許可セラ
レントヲ請求セリ原告ノ要求スル所ハ賠償并ニ訴訟費用トシテ被告ヨリ八十五萬弗ヲ得
ントスルニ在リ然ルニ被告ハ之ニ答辯シテ該衝突ハ單ニ千島艦カ不當ノ航海ヲ爲シタル
ニ原因セリ依テ被告ニ於テハ其責任ナキノミナラズ被告ハ爲メニ損害ヲ被ムリタルヲ以
テ原告ハ之カ賠償トシテ十萬弗ヲ償フノ責任アリト陳辯シ以テ當法廷ニ向テ左ノ三箇條
ノ請求ヲ爲セリ

第一 訴訟手續第五十五條ニ據リ原告ニ對シテ要求セル反訴ヲ許可セラルヘキ事

第二 原告ノ主張スル本訴ト被告ヨリ起シタル反訴トヲ合併シテ審理サルヘキ事

第三 原告ヲシテ英國法廷ノ判決ヲ受理執行セシムル爲メ供托其他ノ方法ヲ以テ法廷ノ
満足セン限リ保證金ヲ出サシムヘキ事

右第二ノ請求ハ反訴ノ受理ヲ請フモノニ非スシテ唯タ或ル許可ヲ得ント求ムルモノナリ其

保證金ノ請求ハ既ニ拒絕サレタリ故ニ茲ニ考究スヘキハ第一ノ請求ニシテ即チ該反訴ハ受

理スヘキモノナルヤ否ヲ明ニスレハ足レリ果シテ受理スヘキモノタルヲ確定セハ始テ茲ニ
保證金ノ問題ヲ生スヘシ然ルニ原告代理人ハ左ノ理由ヲ以テ之ヲ拒絕セリ

第一 被告ハ訴訟手續第五十五條ニ據リテ云々スト雖是レ原告タル外國人ノ何國ノ人タ
ルヲ問ハス適用スヘキモノニ非ス

第二 假令ヒ右五十五條ニシテ日本人以外何國ノ外人ニモ適用スヘキモノトスルモ日本人
ニ對シテハ決シテ適用スヘキモノニ非ス何トナレハ日本人ハ日英條約ニ於テ在日本

當法廷ニ起訴スルノ權ヲ有スルモ反訴セラル、トヲ認メラレサレハナリ然ラスンハ
直ニ該條約ニ抵觸ス

第三 原告ハ當法廷内ニモ主權ヲ有セリ而シテ「君主ハ非行ヲ爲ス能ハス」トノ原理亦此場
合ニ適用セラルヘシ

第四 若シ原告ニシテ當法廷内ニ於テハ帝王トシテ待遇セラレストスルモ本件ニ適用スヘ
キ法律ハ必ス日本法律タラサル可カラス何トナレハ該衝突事件タル元來日本領海ニ

起リタルヲ以テナリ然ルニ日本法律ニ於テハ此ノ如キ場合ニ於テ反求ヲ許サス
今ヤ之カ斷定ヲ爲サンニ右第四ノ抗辯ハ確固タルモノト認ムト雖是レ簡單ニ反訴ニ對スル以

上三個ノ抗辯ニ付キ述フル所アラムト欲ス第一第二二個條ハ同時ニ之ヲ論辯スヘシ其主
張スル所ハ訴訟手續第五十五條ハ原告タル外國人ノ何國ノ人タルヲ問ハス適用スヘキモノ

ニ非ス假令ヒ然ラストスルモ本件ノ場合ノ如ク日本人原告タルキニハ何ノ効力ヲモ及ホス
トナシト云フニ在リ然レ共此點ニ關シテハ別ニ意見ヲ述ヘス何トナレハ右ノ抗辯タル元來

本件ニ於テ必要トスルニモ非サレハナリ當法廷ハ曩ニ本件ニ於ケル別種ノ爭點ニ付キ樞密院令ノ「外國人」ト云ヘル語中ニハ原告ヲ包含セスト決定シタルニ原告ハ既ニ之ニ満足ヲ表シタリ抑モ所謂「外國人」トハ支那皇帝及日本天皇ノ臣民并ニ英國女皇陛下ト親好アル其他ノ國ノ臣民ノミニ限レリ故ニ訴訟手續第五十五條ニ謂フ所ノ「外國人」云々ノ規定モ亦皇帝ニ對シテ適用ス可カラサルヲ問ハスシテ明ナリ第三ノ理由ニ至リテハ原告代理人ノ議論ニ二様ノ階段アリト推測ス即チ當法廷ニ於テハ外國主權ヲ認メサルニ満足シ而シテ又反對ニ當法廷ニ主權ヲ有スト云ヒ且ツ原告ハ事實上帝王タルヲ主張ス是レ反對セサル可カラサル所ナリ第一、天皇陛下ハ日本ニ於テハ主權者タルヘキモ當法廷内ニ於テハ本件ノ原告タルニ過キスシテ其外國主權者タルヲ支那皇帝其他特ニ樞密院令ヲ以テ指示シタル主權者ト同様ナリ第二、天皇陛下ハ當法廷ニ於テハ英國女皇陛下ト親好アル諸他外國主權者ノ有スル主權以外ニハ些少ノ主權ヲモ有スルヲナシ換言スレハ當法廷内ニ於テハ毫モ主權ヲ有セサルモノトス第三、當廷内ニ於テ帝王ト認ムルハ唯タ英國女皇陛下アルノミ而シテ當法廷及ヒ其他ノ領事裁判所ハ皆英國女皇陛下ノ認許ト樞密院令トニ由リ設立シタルモノニシテ當法廷ノ名稱ハ日本英國領事裁判所ト稱シ日本國內ニ起リタル民事刑事ノ裁判權ヲ有ス故ニ原告代理人ノ主張スル所ニ從フハ英國女皇陛下ニ屬スル當法廷ノ威嚴ヲ損スルモノト信ス

今ヤ第四ノ抗辯理由ニ論及センニ反訴ヲ拒絕スルニ有効ナルハ唯此理アルノミ即チ其理由ハ衝突ノ起リタル場所ハ日本領海ナルヲ以テ之ニ適用スル法律ハ日本法律ナラサル可カラス果シテ然ラハ日本法律ニ於テハ此ノ如キ場合ニ於テ反求ス可カラスト云フニ在リ之ニ關

シテハ種々ノ疑問アリテ生ス先ツ第一ニハ衝突地ハ果シテ日本海ナリヤ否ヤノ疑問ヲ生スヘシ然ルニ原被告兩造ノ請求スル所ト答辯スル所トニ據レハ衝突地ノ如何ニ付テハ爭論アルモノト見エス依テ此疑問ニ關シテハ原被告兩造相一致シテ本官ノ決定ニ一任シタルモノト認メ尙ホ先例并ニ海圖ニ據リテ該衝突地ハ日本領海ナリト判決ス而シテ領海ト云ヘル言語ハ固ヨリ國際法ヲ以テ認メタル意義ヲ有スルモノトス

以上ノ事實ニシテ一定シタル以上ハ是ヨリ生スヘキ問題ハ日本ノ法律如何ト云フナリ外國ニ於テ犯サレタル私犯ニ關シテ英國法廷ニ於テ訴權ヲ與フルハ如何ナル場合ニ於テスヘキ乎英國法律ノ原則ニ據レハ其訴訟ニシテ二個ノ條件ヲ有スレハ可ナリトス第一犯行地ノ法律ニ於テ起訴シ得ヘキモノタル事第二英國法律ニ於テモ亦起訴シ得ヘキモノタル事然ルニ本問題ニ於テハ勿論右第一條件ノ成立シタルヤ否ヲ究ムレハ足レリ故ニ日本法律ニ問ハサル可カラサルナリ即チ民事ノ責任ハ犯行地ノ法律ニ由テ發生シ責任ノ性質如何ハ其法律ニ由テ決定ストハフキリツツ對キールノ訴件ニ於テ定マレル所タリ而シテ外國法律如何ハ是レ特別ナル事實ノ問題ニシテ之ヲ決定スルニハ普通一般ノ方法ニ據ラサル可カラス英國法廷ニ於テハ嘗テ「或ル非行ハ果シテ其國ニ於テ非行トシテ成立スヘキヤ否ヤ」ト云ヘル標準ヲ認メテ以テ此等ノ問題ヲ決定セリ

此標準ヲ以テ本件ニ適用セムニ千島艦ハ軍艦ニシテ其所有權ハ日本天皇ニ屬セリ然ラハ其臣僚タル者ノ爲シタル不當航海ヨリ生スル責任ニ付テハ日本法律ハ如何ニ之ヲ處理スル乎是レ日本法律ニ精通セル人ノ證明ヲ待タサル可カラス依テ之ヲ穗積陳重氏ノ陳述ニ見ルニ曰ク「日本法律ニ從ヘハ日本天皇ハ非行ヲ爲シ能ハス又陛下ハ神聖ニシテ侵ス可カラス故

ニ臣僚タル諸官吏ノ非行、過失ニ原因セルモノ并ニ此ノ如キ義務ノ履行其他ニ付キ人民ヨリ訴ヘラレ玉フモノニ非ス。ト去レハ日本天皇ハ此ノ如キ法律ニ於テ此ノ如キ原理ニ因テ絶體無限他ニ比類ナキ特權ヲ有シ玉ヘリ故ニ日本天皇ニ對シ奉リ日本領海ニ於テ其臣僚タルモノ、不當航海ヨリ生シタル損害ヲ求メントスル訴ハ英國法廷ニ於テ起訴スルヲ得ス。此道理ニ據リテ想像スレハ日本法律ノ保護ヲ受ケタル日本ノ一人モ亦本件ニ於ケルカ如キ反訴ハ天皇陛下ニ對シ奉リテハ起訴シ能ハサルモノナラム故ニ本官ハ被告ノ請求ヲ棄却ス。今其理由ヲ左ニ畧說セム。

衝突地ノ法律ニ據ルニ原告人ハ其臣僚ノ非行ニ責任ヲ負ハサルヲ以テ其臣僚ノ行爲ヨリ生シタル損害ニ對シテ英國法廷ニ起訴スヘキモノニ非ス。

右ノ理由アルカ故ニ原告ヲシテ反訴ニ因リ責任ヲ負ハシムルヲ得ス。

● 第一

以上ノ裁判録并ニ判決文ニ據レハ則チ我政府ノ代理人カ訴訟ノ進行中畏クモ御名ヲ引用シタルコト最早ヤ掩フ可カラサル事實ナルコト明白ニシテ爲ニ反訴ノ點ニ付テハ我政府ノ勝利ニ歸シタルコト亦知ル可シ然ルニ彼阿會社ハ右判決ニ不伏ヲ懷キ之ヲ在上海英國上等裁判所ニ控訴シテ反訴許可ノ審判ヲ求メタリ是ニ於テカ我政府ハ被控訴人トシテ代理人ヲ右裁判所ニ出廷セシメタリ其申立ノ要領ハ双方トモ前裁判所ニ於ケルモノヲ復タヒシタルニ止ルヲ以テ茲ニハ其裁判録ヲ省略シテ直ニ該裁判所ノ判決文ノミヲ摘譯セリ。

上海上等裁判所倍席判事ノ判決

本件ハ一千八百九十二年十一月三十日日本帝國軍艦千島トビーオー會社ノ汽船ラヴェン

ナトノ衝突ヨリ軍艦千島ノ沈没ヲ來タシ爲メニ原告ヨリ損害要償ノ訴訟ヲ起セシニ對シテ被告ハ反訴ヲ請求セシモ原裁判所ハ之ヲ許サルヨリシテ當裁判所ニ上告スルニ至リシモノナリ

本件ノ事情及ビ多識ナル原裁判所判事ガ被告ノ反訴ヲ棄却シタル理由等ハ只今朗讀サレタル裁判長ノ判決文ニ詳記スル所ノ如シ

先ツ最初ニ考察ス可キ點ハ今回ノ衝突タル日本ノ法律ヲ適用シテ然ルベキ有様ヲ以テソノ領海内ニ起リタルヤ否ヤト云フ一點ナリ因テ本官ハ暫ク治外法權ノ問題ヲ度外ニ措キ便宜上本件ノ衝突ヲ以テ各其國ノ國旗ヲ掲ゲタル二箇ノ私有船ノ間ニ起リタルモノト假定セシ

第一衝突ノ場所ノモノニ就テ論究スルニ原裁判所ノ判決文中實ニ左ノ文言アリ

此衝突ノ起ラントスル前、及ビ其起リタル時、兩船ノ在リシ所ハ睦月島ト興居島トノ間ナル興居島瀬戸ト唱フル狹キ海峡ニシテ抑モ是等島々ノ所在ハ日本内海ト稱シ陸地ニテ圍繞サレタル幾多ノ港灣ヲ含ミ、東西延長二百四十哩、ソノ入口都合四箇所ニシテ内二箇所ハ甚ダ狹ク第三ノ入口ハ廣サ二哩第四ノ入口ハ二支ニ分カレテ其廣キ方モ四哩ヲ超エズ而シテ被告ノ答辯中ニ興居島トアルハ則チ此内海ノ南境タル四國ノ北岸ニ接近セシ所ニアリ同ジク其答辯中ニ衝突ノ現場トシテ記載サレタル興居、睦月兩嶋間ノ海峡ハ其幅僅ニ二哩ニシテ四國ノ最近海岸ヨリ測量スレバ其距離三哩ニモ足ラザル位ナリ

原裁判所ノ名法官ハ更ニ語ヲ次イデ曰ク

是ニ由テ之ヲ觀レバ此衝突ノ起リシハ日本帝國ノ領海内ナリシコト蓋シ寸分ノ疑ヒヲ許サズ云々

ヨシ一步ヲ讓リテ尋常一樣ノ地理學上又ハ國際公法上ノ議論ヨリシテ此内海ヲ日本ノ領海ナリト許スモ内海ノ全部、若シクハ其衝突ノ起リタル一部分ガ其部分ニ生ジタル一切ノ人事、一切ノ船事ニ悉ク日本法律ヲ適用スベキ程ノ日本領海ナリヤ否ヤ是レ必ズ爰ニ起ルベキノ問題ナリ

扱テ又此衝突ノ起リシハ海岸ヲ距ル三哩以内ノ所ニ相違ナシトスルモ日本ノ港灣内ニアラザルハ明白ノ事實ニシテ本件ニ對スル好判決例ハフランコニヤ號事件即チ是ナリ同號ハ外國船ニシテ船長モ亦外國人ナリシガドーヴァー海濱ヲ距ル二哩半ノ公海ニテ英國船ニ衝突シ之ヲ沈没セシメタル廉ヲ以テ英國中央刑事裁判所ハ其船長ヲ吟味シテ殺人罪ニ處シタリ然ルニ法律上本件ハ英國裁判所ノ管轄ニ屬スルヤ否ヤノ疑問起リ一方ハ公海ニ於ケル外國船ノ外國人ニ擬スルニ英國ノ法律ヲ以テスルハ不合理ナリト論ジ一方ハ其衝突ノ英海岸三哩以内ニ起リタルガ故ニ英領内ノ犯罪人トシテ其罪ヲ問フノ至當ナルヲ辯シ遂ニ國際上ノ問題トナリ、外海三哩以内ヲ純然タル自國ノ領分ト定メ其内ニハ自國ノ法律ノミ獨リ最上權ヲ有スルモノト認定シテ可ナルヤ否ヤニツキ可否兩論者ノ互ニ論難攻撃ノ末遂ニ右中央裁判所判事ノ多數ハ此事件ヲ以テ英國ノ裁判權以外ナリト判定シタリ而シテ其判定ノ要領ヲ摘メバ結局左ノ三點ニ歸ス

一 各國ノ立法者ハ國際法ノ原則ニ遵ヒ他國ノ船舶ノ自由航海權ヲ妨ゲザル限リハ自國ノ沿岸三哩以内ノ外海ニ國法ノ効力ヲ及ボシ其海上ニ於ケル一切ノ人事ヲ管轄スル

事ヲ得

二 但シ國際法ノ力ニ依リテノミスク國法ノ効力ヲ及ボシ得ルモノト見做ス可カラズ此國法ノ効力ノ有無ハ其國(假令ハ英國)ニ特別ノ成文律若シクハ普通法ノ實例有ルト無キトニ由テ決定シ外國ニ對シテハ其國ニ斯ル規定若シクハ實例アリト證明セラルト否トニ由テ決定ス

三 之ガ爲メ特別ノ立法ナキトキハ領海ナルト同時ニ又公海ナル海上ニハ其國ノ國法ヲ及ボスコト能ハズ但シ港灣河口ハ此限リニアラズ

當時フランコニヤ事件ノ裁判長コックバーンノ判決中、三哩以内ニ於テ外人ヲ制束スルノ法律ヲ制定スル立法權ト斯クノ如キ法律ナクシテ直ニ裁判ヲ行フ裁判權トハ明カニ之ヲ區別スルノ必要ヲ説キ三哩ノ制限内ニ斯ル法律ヲ設クルハ其國ノ權内ニ屬スレドモ未ダ斯ル法律ナクシテ司法權ヲ爰ニ及ボスハ不當ナリト論ジ次ニ又三哩内ノ外海ト港灣河川トハ十分ニ之ヲ區別シ港灣河口ノ其國ノ版圖タルハ猶ホ陸地ノ其國ノ版圖タルガ如ク一點ノ間然スベキ所ナク外國船ガ故意ニ其港ニ入りタルトキハ恰モ旅客ガ鐵道又ハ道路ヲ踏ミテ其國境ニ入りタルガ如ク其國ノ法律ニ從フ可キコト論ヲ俟タズ然レドモ若シ其外船ガ其國ノ港灣河口ニ碇泊スルナク唯其沿海ヲ何心ナク通航スル場合ニハ其三哩以内ノ海上ニアルト否トヲ問ハズ之ニ對シテ國法ヲ施スコト能ハザルナリ左レド該船ニシテ一旦其方向ヲ轉ジテ港灣ニ向ヒ列國ノ公道ヲ去リタルトキハ則チ一國ノ私領ニ立入りタルモノニシテ其國ノ國法ニ從フ可キハ無論ナレドモ斯ル場合ニハ精密ニ其境界線ヲ定ムルコト甚ダ困難ニシテ各其時ノ事情ヲ精査シ以テ之ヲ判定スルノ外アルベカラズ

一千八百七十八年ニ發布サレシ英國領海裁判權法ノ凡例ニ記ルサレタル文言ハ大ニ前項ノ推論ヲ確ムルニ足ルモノアリ曰ク

英國女皇陛下ノ正當ナル司法權ハ是迄常ニ合衆王國附近ノ外海ニ及ヒ來リタルガ故ニ、又海岸ヨリ一定ノ距離内ナル外海ニテ犯セシ罪ハ其犯罪人ノ何人タルヲ問ハズ一切英國ノ法律ヲ以テ之ヲ處スルノ至當ナルガ故ニ、由テ本法ヲ制定ス云々

コレヲ換言スルニ英國女皇陛下ハ從來常ニ國土附近ノ海上ニ於テ如何ナル人ニ對シテモ其法律ヲ制定執行スルコトヲ得タリ左レバ今更ラ同一ノ海上ニ於テ外國人ニモ内國人ニモ皆一樣ニ英國刑法ノ効力ヲ及ボストモ決シテ不都合ノ事ニアラズ故ニ此領海裁判權法ヲ制定ス云々トノ主意ニシテ英國立法者ハ既ニ斯クノ如ク其法權ヲ擴張シナガラモ尙是等海上ニ船舶ヲ通航セシムル諸外國ノ權利感情ヲ重ンジ、右ノ法律ニ從ヒ外國人ニ對シテ刑事訴訟ヲ起ス場合ニハ必ズ一人ノ國務大臣ノ承諾ヲ得ザル可カラザルコト、セリ

依テ今、以上ノ論旨ヲ本件ニ適用スルニ假リニ千島艦ヲ以テ日本ノ一私有船ト見做シ且ツ日本ノ法律ヲ以テ西班牙ノ法律ニ等シキモノト見做セバ原告ハ此際本件ニ適用スベキ日本法律アリトノ事ヲ證明ス可キノミナラズ日本ノ立法者ハ三哩以内ノ一切ノ船舶ニ對シテ其法律ヲ適用スベキ手筈ヲ爲シタリトノ事實ヲモ併セテ證明セザル可カラズ是ノ故ニ假令ヒ本件ノ衝突地ヲ以テ三哩以内ノ公海ニアリト假定スルモ從來日本ノ國法ガ是等ノ海上ニマデソノ効力ヲ有シタリトノ事實ニシテ證明セラレザル以上ハ原告ノ辯護、到底無効タル可シ

次ニ此ノ衝突ハ日本ノ「瀬戸内」ト稱フル内海ニ起リタルトノ事實ヲ以テ以上ノ論旨ヲ破ル

ニ足ルカ、否唯「瀬戸内」ト稱セラレタルノ故ヲ以テ斯ル大海ヲバ直ニ日本ノ港灣河口ト見做シテ以テ其内ニ於ケル一切ノ船舶ニ日本ノ國法ヲ適用スルコトヲ得ルカ、本官ハ決シテ然リト思ハズ是迄モ既ニ述ベタル如ク此瀬戸内海ハ各國船舶ノ自由通航ヲ許シタル處ニシテ所謂太平洋通ノ一部分ト思考スルモ不可ナク現ニ各國ノ船舶ハ日本政府ノ許可、免狀ヲ得ズシテ東西南北自由自在ニ此處ヲ通航シ且ツ原裁判所ノ判決文ニモ記セルガ如ク東西二百四十哩、南北六十哩乃至八十哩ノ所モアリテ殆ト外海ト見テモ差支ナキ程ナリト云フ加フルニ其内ニハ神戸ト稱フル開港場アリ其外ニハ長崎港アリ長崎港ハラヴエンナ號ノ碇泊所ニシテ例ヘバ此内海ノ西口ヨリ入り來ル船舶ハ必ズ皆ナ神戸ニ立寄ルモノト限ラズ其船ノ都合ニ由リテハ全ク神戸ヲ警見セルコトスラ無クシテ直ニ其極東ノ出口ヨリ出テ去ル事ヲ得ベシ時トシテハ船舶細峽ニ入りシバ、陸地ニ接近シテ航海セザルヲ得ザル場合ナキニシモアラネド此瀬戸内ヲ通航スルト彼ノソレント若シクハ愛蘭海峽ヲ通航スルトノ間ニ果シテ如何ノ差異アルカ辯解ニ苦マザルヲ得ズ是故ニ本官ハ此事件ヲ以テ彼ノニウパツトルノ判決例ニ照ラシ其情狀恰モ等一ナルヲ以テ必ズ反訴ヲ許可スベキモノト判定ス

然ルニ原告ハ又抗辯シテ曰ク本件ガ若シモ英本國ノ海事裁判所ニ提起セラレタル場合ニハ前上ノ推論或ハ當ランカナレドモ在日本英國領事裁判所ハ其規模狹小ナルガ故ニ左ノ三件ニ由リテ其權力ヲ殺ガレタリ

第一 日英兩國間ノ條約文

第二 領事裁判所ヲ構成シタル英國樞密院令

第三 領事裁判所ノ訟訴手續

以上ノ諸件ニ從フトキハ在日本英國領事裁判所ハ日本帝國ノ臣民ニ對シテ反訴ヲ受理スル
 權力ナシ然ルヲ況ンヤ其皇帝陛下ニ對シテヲ原告ハ又原裁判所ニ於テ抗辯シタルガ如
 ク當法庭ニテモ抗辯シテ曰ク日本皇帝陛下ハ在日本英國領事裁判所ニテ主權ヲ有ス故ニ
 「主權者」トシテ待遇セラレザル可カラズト此一段ハ原裁判所ニテ既ニ論破シ盡シタル本
 官ハ唯コレニ同意ヲ表スト云フノ外マタ多辯ヲ要セザル可シ
 次ニ又原告代理人ハ當法庭ニテ長々シク陣辯シテ曰ク日本ニ於ケル英國女皇陛下ノ裁判權
 ハ元ト日本皇帝陛下ノ委任ヨリ出デタルモノニシテ日本皇帝陛下ハ其臣民ニ對シテ反訴ヲ
 受理スルノ權ヲ彼レ英國領事裁判所ニ與ヘザレバ該領事裁判所ハ日本臣民ノ出訴ニ對スル
 反訴受理ノ權ヲ有セザルコト勿論ナリト

是レハ甚ダ領事裁判制ノ本原ヲ誤解シタル議論ナレドモヨシ數歩ヲ讓リテ其議論ニ從ヒ日
 本ニ於ケル英國女皇陛下ノ法權ハ日本皇帝陛下ノ委任ニ基クモノナリトスルモ日英兩國ノ
 臣民間ニ起リタル訴訟事件ニ關シ條約ハ如何ナルコトヲ言ヘリヤ一千八百五十八年八月二
 十日ニ訂盟セル條約文中第五條及ビ第六條ハ正シク本件ニ關係セルモノナリ其第五條ハ刑
 事ノ犯罪ニ關シ規定シタルモノニシテ其文左ノ如シ(當時ノ和譯文ノマ、掲グ)

「貌利太尼亞臣民ニ對シ惡事ヲ爲セル日本人ハ日本司人ニテ糾シ日本法度ニ隨テ罪スベ
 シ日本人或ハ外國ノ臣民ニ對シ惡事ヲ爲セル貌利太尼亞臣民ハコンシユル(CONSUL)即チ
 領事ノ事)或ハ其他ノ官人ニテ糾シ貌利太尼亞ノ法度ニ隨テ罪スベシ裁斷ハ双方ニ於テ
 偏頗ナカルベシ」

第六條ハ民事訴訟ニ關シ云々シタルモノニシテ其言フ所甚タ趣キヲ異ニセリ曰ク

「貌利太尼亞人、日本人ニ付テ訴フベキ事アラバコンシユル館ニ赴キ其旨ヲ告ゲベシコン
 シユル吟味ノ上實意ニ處置スベシ萬一差掛リ日本人ヨリ貌利太尼亞人ニ就テコンシユル
 ヘ訴ヲ爲ス事アル共又コンシユル實意ニ處置スベシ若シコンシユル是レヲ處置シ難キト
 キハ日本司人ヘ申立、俱ニ吟味シ當然ノ判斷ヲ爲スベシ」ト

依テ本官案ズルニ英國領事或ハ領事裁判所ニテハ日英兩國ノ原被兩造共ニ從順ニ訴ヘ出デ
 タル場合ニ勸解裁判所ノ格式ヲ以テ日本人ハ被告ニ對スル訴訟ヲモ受理スル權アルハ右ノ
 條約文ニ照ラシテ明カナリ即チ日本人ハ故意ニ英國領事裁判權ニ服從シタルモノニシテ英
 國領事ハ正シク英國人ノ被告ト同様ニ日本人ノ被告ヲモ取扱フ事ヲ得ルナリ右第五條ト第
 六條トヲ比較スレバ民事ノ訴訟ニ於テハ刑事ノ訴訟ニ於ケルヨリモ一層大ナル權力ヲ英國
 司直ノ吏ニ與ヘタルコト一目瞭然タル可シ尤モ實際ニ於テ第六條ノ末文ニ示スガ如キ混合
 裁判ハ兩國ノ同意ヲ以テ既ニ拋棄セラレ目下條約相齊シキ日本支那兩國一般ニ行ハル、所
 ノ通則ハ被告人ガオノ、自國ノ法庭ニ追訴セラル、事是レナリ左レド前ニモ既ニ述ベタ
 ル如ク樞密院令中、在日本英國領事裁判所ニ與フルニ反訴受理ノ權ヲ以テシタル様ノ文言
 アル以上ハ單ニ條約云々ノ事故ヲ以テ其權ヲ日本原告人ニ適用スルコト能ハザル筈ナシ
 在日本英國領事裁判所並ニ當法庭ヲ構成シタル千八百六十五年ト同シク七十八年ノ樞密院
 令第百十七條ニ外國人(日本皇帝陛下ノ臣民モ其内ニ含ム)ノ英國臣民ニ對シテ起シタル訴
 訟ハ同令及ビ同令ニ依テ構成サレタル訴訟手續ニ從テ判決ス可キ事ヲ規定シタリ而シテ訴
 訟手續第五十五條ハ領事裁判所ニ反訴許否ノ任意權ヲ與ヘ且ツ適當ト認ムル場合ニハ原告
 ヲシテ反訴ノ判決ヲ服膺實行スルノ保證ヲ爲サシムル權ヲ與ヘタルモノニシテ其原告ノ英

國人タルト外國人タルトノ間ニハ別ニ何等ノ區分ヲモ設ケズ故ニ原告ガ日本人若シクハ支那人ナル場合ニハ實際如何ニシテ可ナル可キヤト當初多少ノ議論アリシコト當法庭ノ記錄ニ見ユ嘗テ支那商船フーシン號ト云ヘルガ公海ニ於テ英國漁船オーション號ト衝突シテ沈没シタル事アリシ其時原告支那人ニ對シ反訴ヲ提起シタルニ之ヲ拒絕シタリト云フ其拒絕シタル理由ハ反訴ノ時期後レタリト云フニアリシ由ナルガ當時ノ裁判官エドモンド氏ニ兩船共ニ非難ス可キ點アリトテ通常ノ海軍裁判法ニ從ヒ双方ノ損害高ヲ調査シ原被告兩造半バツ、負擔ス可キ旨ヲ言渡シタリ而シテ其言渡中ニ附言シテ曰ク假令ヒ反訴ハ提起セザルモ是レ公平ノ裁判ナリト氏ハ又同時ニ支那人ノ原告ニ對スル反訴ヲ受理シテ然ルベキヤ否ヤニ疑ヒヲ存シタリ然レドモ其後一千八百八十一年ニ起リタルホーチュン號對ラツブウキング號事件ハ同シク支那船ト英國船トノ衝突ナリシカドモ當法庭ニ於テハ原告支那人ニ對スル被告英國人ノ反訴要求ヲ許シ且ツ原告ヲシテ反訴ニ應ズルノ保證ヲ爲サシメタリ尤モ此事件ハ上告サレタレドモ上告ノ主意ハ他ニアリテ反訴云々ノ事ニアラズ故ニ此先例ニシテ拋棄セラレザル以上ハ手續第五十五條ヲ實行シタル實例トシテ本件ヲ取ラザル可カラズ其後一千八百八十一年十二月三十一日ヨリ實施サレタル改正樞密院令ニヨリ千八百六十五年ノ樞密院令第十七條ハ廢棄セラレ外國人ノ提起セル訴訟並ニ英國人ノ被告ヨリ外人ニ對シテ起ス所ノ反訴ニ就テハ特別ノ規定ヲ設ケタリ然レドモ本件ノ原告ハ原裁判所ニテ陳辯スラク

日本ノ皇帝陛下ハ則チ日本ノ皇帝陛下ニシテ右樞密院令ニ謂フ所ノ「外國人」ニアラズ爰ニ所謂外國人トハ「支那皇帝陛下ノ臣民若シクハ日本天皇陛下ノ臣民若シクハ英國女皇

陛下ト親好アル其他ノ諸國臣民或ハ人民」ヲ意味スルモノト解釋サレタルニ因リテ考フレバ日本皇帝陛下ハ通例一般ノ外國人ニアラセラレザルコト勿論ニシテ一千八百八十一年ノ樞密院令四十七條ヲ本件ニ適用スルハ不都合ナリ

ト此辯論ハ原裁判所ニテ是認セラレ本官モ亦異存ナキ所ナリ左レバ此辯論、果シテ其當ヲ得タルモノトスレハ在日本英國領事裁判所ニ於テ日本皇帝陛下ガ原告ト認メラル、ハ如何ナル明文ニ由ルヤ又現行樞密院令第何條ガ本件ニ適用セラレ、可キヤ是レ爰ニ起ルベキ當然ノ質問ニシテ訴訟手續第五十五條カ然ラザレバ其第三百三十九條ヲ適用スル外アル可カラズ而シテ本官ハ寧ロ第三百三十九條ヲ用フ可シト云フ意見ナリ同條ハ「訴訟手續ニ明文ナキ一切ノ事項」ニ就テハ上等裁判所ノ訴訟手續若シクハ海事ナラバ英國本海事裁判所ノ訴訟手續ニ從フノ自由ヲ各領事裁判所ニ與ヘタルモノニシテ即チ右二個何レノ手續ニ由ル反訴ヲ受理シ且ツ適當ト認ムル場合ニ保證ヲ命ズルノ權ハ領事裁判所ニ之レアルナリ

扱テ本件ヲ全體ヨリ觀察スレバ條約ニモ樞密院令ニモ又訴訟手續ニモ嘗テ何等ノ明條ナキ訴訟ニシテ彼ノ條約ノ如キハ兩國臣民間ニ起リタル事件ヲ處理センガ爲メニ英國女皇陛下ト日本天皇陛下トノ間ニ取結ビタル契約ナレバ雙方主權ノ運用ニ關シテハ別ニ規定シタル所アラザルナリ英國女皇陛下ハ此契約ヲ履行センガ爲メニ日本ニ一ノ法衙ヲ創設シテ英國臣民ト英國臣民間外國人ト英國臣民間ノ訴訟ヲ審判シ且ツ日本ニ於テ英國臣民ノ犯シタル重罪輕罪ヲ處刑セシメ加フルニ其法衙ヲ以テ準海事裁判所ト爲シ總テ日本ニテ起リタル英國所關ノ船事ニ對シ一般ノ準海事裁判所ト同様ノ權力ヲ有セシメタリ而シテ今ヤ日本天皇陛下ハ自ラ好シク此法庭ニ來リ英國汽船ニ對シ其軍艦ノ沈没シタル損害要償ニツキ此法庭

ノカヲ借ランコトヲ請求シタリ然ルニ被告ハ之ニ答ヘテ此衝突ハ全然原告船ノ不當航海ノ爲メニ起リタルモノニシテ當ニ其損害ヲ賠償スルノ義務ナキノミナラズ却テ原告ヨリ巨額ノ損害ヲ要求スベキ權利アルガ故ニ此反訴ヲ本訴ト共ニ受理審判アリタシト申立デタリ因テ今差掛リタル疑問ハ日本ノ皇帝陛下ニハ被告ヨリ要求セシ損害ニ對シテ何ノ顧慮スル所モナク獨リ自己ノ請求ヲノミ裁判セラレムコトヲ要求スルノ權利アリヤ如何、又此衝突ニ就テハ兩船共ニ非難スベキ點アルニモ拘ハラズ被告ニハ唯日本法庭ニ訴フルノ餘地ヲ殘シテ獨リ自船ノ損害ヲノミ回復セントスル自由權アリヤ如何トイフノ一事ナリ斯ノ如キ明白ノ疑問ヲ設ケタル上ニテ扱テ本官ノ案ズル所ニ據レバ裁判學上ノ原理ト公平判決ノ道理トニ照ラシテ右ハ到底無理ナル注文ト謂ハザルヲ得ズ若シ當法廷ニ本件ヲ裁判スルノ權力アリトスレバ他ノ英國法衙ニ訴へ出デタルト一般、原告ハ自己ニ對シテ假令ヒ不利益ノ命令アリトモ豫メ之ニ服従スルノ覺悟ニテ訴へ出デタルモノト認メザル可カラズ始メヨリ不公平ノ判決ヲ望マントナラバイザ知ラズ苟クモ公平ノ判決ヲ望ンデ來タル以上ハ斯クト認メラル、コト當然ニシテ訴訟ハ素ヨリ正義ヲ求ムルモノナレバ正義ヲ求ムル者ヲ以テ正義ヲ求ムル者ト見ルモ何ノ不可カララン若シモ此訴訟ニシテ在英國倫敦ノ本海事裁判所ニ出デタラシメバ彼ノニウバツトルノ衝突事件ト同様ニ看做サレテ裁判ノ進行上必ず原告ハ被告ノ反訴ニ對シテ保證ヲ命ゼラレムコト疑フ容レズ唯單ニ治外法權ノ下ニ構成セラレタル領事裁判所ニ出訴シタリトノ故ヲ以テ原告ニ廣大ナル特權アリト云フノ道理アルベカラズ况ンヤ右治外法權ノ條約文ハ唯兩國臣民間ノ訴訟事件ニ關シ規定セシモノナルヲヤ故ニ原裁判所ニテ本件ヲ受理スルノ權アル以上ハ反訴ヲ受理スルノ權モ亦コレアルハ言フ迄モナ

キ事ニシテ本官思フニ今回ノ場合ノ如キハ原裁判所ニテ保證ヲ命ズルモ亦差支ナキ筈ナリ

最後ニ原告ハ當法庭ニテ陳辯シテ曰ク假令ヒ本件ニ對シ英國上海裁判所ノ規則ヲ適用セントスルモ被告ノ船舶ハ差押ヘラレモセズ又保釋金モ徴セラレザリシニ獨リ原告ニ對シテ保證ヲ命ズルハ不公平ナリト然レドモ當裁判長ハ本件ニ適用スルニ訴訟手續第五十五條ヲ以テスルノ意見ナレバ其意見ニ對シ斯ル議論ノ起ル可キ道理ナシ左レドモ本官ハ原被告兩造ノ間ニ取り替ハシタル書簡ヲ閱覽シタルバ之ニツキ敢テ一言セントス右ノ書簡ハ双方互ニ正式ノ保釋金ノ代リニ簡便ナル「約束」ヲ取り替ハシ置キタルモノニシテ即チ保證ノ事ニ關シテハ双方トモ嚴格ナル法律上ノ權利ヲ主張セザル可シトノ證書ニ相當シタルモノナリ原告ハ當時被告ノ船舶ヲ差押ヘズシテ唯單ニ被告ニ向ヒ本件ニ應答シテ若シ敗訴シタルトキハ損害ヲ賠償ス可シトノ約束ヲ結バン事ヲ請求シ被告ハ其請求ニ應ジテ約狀ヲ與ヘ更ニ原告ニ望ムニ若シモ我ヨリ申請シタル反訴ニ敗レタルトキハ其反訴ニ記シタル損害高及ビ訴訟入費ヲ辨償スベシトノ約狀ヲ差出サン事ヲ以テシタリ日本政府ハ之ニ對シ「若シモ被告ニ反訴ヲ提起シ又ハ保證ヲ要求スルノ權利アラバ之ニ從フベキ旨」ヲ答ヘタリ而シテ今ヤ被告ニ此權利アル事ハ既ニ確定シタルガ故ニ隨テ日本政府ノ此約言モ亦確定シタルモノト謂ハザルヲ得ズ原被告兩造既ニ斯クノ如ク互ニ契約ノ文言ヲ取替ハシ以テ裁判所ノ判決ニ服従スルコトヲ承諾シタル以上ハ之ヲ立脚ノ基礎トシテ本件ノ進行ヲ計ルベキナリト本官ノ敢テ信ズル所ナリ

上海上等裁判所主任判事ノ言渡全文

是レ同裁判所ノ裁判長ハンネン氏ノ言渡シタル判決全文ニシテ前ニ譯載シタル陪席判事ヂヤミーンソン氏ノ判決ニ比スレハ其歸着スル所ハ固ヨリ異ナルト有ルナシト雖モ推論ノ如何ニ因テハ彼此ノ間多少ノ趣キヲ異ニスル所ナシトセス而シテ是ヨリ生スル關係タル至テ重大ノモノ有ルニ依リ更ニ之ヲ譯載シテ江湖ニ示ス

此訴訟ハ日本帝國ニ對シテ在橫濱英國領事裁判所ヨリ當法廷ニ上告シタルモノニシテ事ノ起リハ被告ビーオー會社ノ所持船ラベンナ號ノ衝突ニ因リ千島艦ノ沈没シタル其損害ヲ賠償セシコトヲ原告ヨリ被告ニ對シ在橫濱英國領事裁判所ニ向テ起訴シタルニ基ツキ原告ハ兩船ノ間ニ起リタル其衝突ヲ以テ全クラベンナ號ノ罪ナリト申立テタリ

然ルニ被告ハ之ニ答ヘテ毫モラベンナ號ノ罪ナキヲ陳ジ且ツ此衝突ハ其當時千島艦ノ甲板上ニ在リシ者等ノ失策ニ因レリトノ申立ヲ爲シタリ

次ニ被告ハ原告ニ對シテ反訴ヲ許可セラレン事、本訴ト反訴トヲ同時ニ審問アラン事、及ビ原告ヲシテ反訴ニ對スル英國法廷ノ判決ヲ受理實行スルノ保證ヲ爲サシメン事等ヲ要求シタリ然ルニ橫濱領事裁判所ニテハ左ノ如キ簡單ナル理由ヲ以テ其要求ヲ拒絕セリ曰ク衝突ノ場所ハ日本ノ領海内ナルガ故ニ本件ニハ日本ノ法律ヲ適用ス可シ而シテ其ノ法律ニ從ヘバ原告タル日本皇帝陛下ハ其臣僚ノ非行ヲ以テ訴ヘラルベキモノニアラズ、故ニ假令ヒ被告ノ答辯ハ正當ナルモノトスルモ被告ハ原告ニ對シテ如何ナル請求ヲモ之ヲ爲スニ道ナク隨テ被告ハ反訴ヲ請求スルノ權ナシト

要スルニ此判決ノ基礎ハ衝突ノ起リタル場所ヲ以テ日本法律ヲ適用ス可キ場所ト認メタルニアリ

衝突地ノ所在ニ就テハ原被兩造共ニ異論ナキモ被告ハ其場所ヲ以テ港灣河口等ニアラズシテ世界列國ノ公道ナリト認メ日本法律ヲ適用スベキ所ニアラズシテ海上法ヲ適用スベキ所ナリト認定シ海上法ニ從ヘバ主人ハ其從僕ノ非行ニ對シテ責任ヲ有スルコト勿論ニシテ若シモ被告ノ答辯成立シタルトキハ被告ハ原告ニ向ツテ賠償ヲ要求スルノ權アルガ故ニ原裁判ノ判事ガ反訴ヲ受理セザルハ不當ナリト論辯セリ

因テ今、事ノ實際ヲ案ズルニ衝突ノ場所ハ列國ノ公道ナルコト蓋シ疑ヲ容レズ如何トナレバ當今支那ヨリ亞米利加ノ西海岸ニ渡航スル郵船ハ大概今度衝突ノ起リタル場所ヲ通過シ又昔時日本ガ此内海ニ外船ノ出入ヲ禁シタルトキ英米佛蘭諸國ハ兵力ヲ以テ日本政府ニ迫リ日本政府ハ終ニ其通行ヲ許シタルハ歷史上顯然タル事實ニシテ是レ取リモ直サズ其所ヲ以テ世界ノ公道ト認定シタルモノナリ而シテ今回ノ衝突ハ則チ此世界ノ公道ニ起リタルモノニ外ナラザレバ在日本英國領事裁判所并ニ當法廷ガ此事件ヲ以テ列國ノ公海ニ起リタル一事件トシテ取扱フモ決シテ不當ノ事ニアラザル可シ

深ク既往ノ實例ヲ案ズルニ嘗テ英國ニ起リタルサキソニヤ事件ト此事件トハ恰モ符節ヲ合シタルガ如ク其趣キヲ同ウセリサキソニヤ事件ノ衝突ハホワイト島ヲ距ル僅ニ半哩、ヤーマウスノ東三四哩ノ海上ニ起リタルモノニシテ其衝突ノ場所ニ就テ言ヘバ今度千島艦對ラヴエンナ號ノ場合ト相似タルモノト云ハザルヲ得ズ然ルニ英國海事裁判所並ニ樞密院ハ之ヲ以テ英國ノ法律ヲ適用スヘキ場合ニアラズト判決シ其言渡中ニ左ノ文言アリ

此衝突ハ外國船ノ自由ニ航海スル權力ヲ有スル公海ニ起リシモノナレバ英國ノ船舶法ヲ以テ論ズ可キ場合ニアラズ云々

當時此言渡ニ反對シテ原告ノ爲メニ種々ノ辯論モアリタレド开ハ茲ニ轉載スル迄モナク左ノ元理ヲ示セバ是非自カラ明白ナル可シ即チ列國ノ公道ヲ往來スル船舶ハ取りモ直サズ世界ノ公海ヲ往來スル船舶ニシテ若シモ其公道ヲ去テ一國ノ領内タル港灣河口ニ入ルトキハ則チ其國ノ領海ニアルモノト認定ス

此ニ由テ之ヲ觀レバ今回ノ衝突モ亦列國ノ公海ニ於テ起リタル事件ニシテ海上法ヲ適用ス可キ場合タルコト言フ俟タズ而シテ海上法ノ規定スル所ニ據レバ他船ニ損害ヲ蒙ラシメタル船舶ノ持主ハ其雇人ノ怠慢ニ對シテ十分ノ責任ヲ負ハザル可カラズ

左レバ萬一本件ニシテ英本國ノ海事裁判所若シクハ英領地ノ準海事裁判所ニ提起セラレシナランニハ原告ハ無論反訴ニ對シテ責任ヲ負ハザル可カラザリシナラン故ニ被告ノ反訴ヲ棄却シタル橫濱原裁判所ノ處置ハ其當ヲ得タルモノト謂フ可カラズ

尙ホ又カークド氏ノ辯論ニ立入りテ之ヲ審判スルモ本官ハ毫モ其反訴ヲ拒絕スルノ理由ヲ見ズ一千八百六十五年ノ樞密院令ニ示スガ如ク「樞密院令ノ條項ニ據リ英國現行法ノ法理並ニ明文ニ從ヒ」此反訴ハ必ズ許可スベキモノトス

同ジク又一千八百六十五年ノ樞密院令第四條ノ命ズル所ニ從ヘバ我々裁判官タルモノハ前述ノ規定ニ由ルノ外妄ニ裁判權ヲ行フコトヲ得ズ隨テ樞密院令及ビ訴訟手續ニ遵フモノ、外カークドノ申立ハ總テ成立セザルモノトス或ハ又本件ハ日本皇帝陛下ガ英國ノ臣民ヲ相手取りテ訴ヲ起サレタルモノナレバ在日本英國裁判所モ當法庭モ之ヲ裁判スルノ管轄權ナシトノ議論モアラン、然リ條約ニモ樞密院令ニモ又訟訴手續ニモ斯ル特殊ノ場合ニ處スル何等ノ條文ナキハ夙ニ本官ノ知ル所ナリ

然リト雖モ其初メ原告ガ此事件ヲ英國ノ法衙ニ訴ヘタルハ則チ我々ニ管轄權アルヲ認メタルモノニシテ被告モ敢テ之ヲ拒マザリシナリ原告既ニ斯クノ如ク在日本領事裁判權ヲ喚起シタル以上ハ之ヲ處スルニ英國ノ法律ヲ用ヒ英國ノ訟訴手續及ビ其樞密院令ヲ用フルハ素ヨリ當然ノ事ナリト謂フ可シ然ルニ橫濱領事裁判所ガ其反訴ヲ棄却シタルハ抑モ樞密院令ノ第何條ニ據リ訟訴手續ノ第何項ニ從ヒシモノナルカ一千八百六十六年ノ樞密院令第百二十七條ハ英國高等法院ノ裁判官ニ與フルニ反訴許可ノ規則ヲ制定スルノ權ヲ以テセシカバ同裁判官ハ其法令ヲ遵奉シテ訟訴手續第五十五條ヲ制定シタリ是レ則チ領事裁判所ニテ反訴ヲ裁判スルノ規約ヲ設ケタルモノニシテ今其章ノ明文ヲ正當ニ解釋スルニ本件ノ反訴ヲ受理スベカラズト云フ理由ハ毫モ之ヲ看出スコト能ハズ然ルニ原告ハ條約ノ明文ヲ循トシテ同條ヲ以テ今ノ場合ニ適用ス可カラズト論ジタリ

若シモ訟訴手續ガ二様ノ解釋ヲ許シ一方ノ解釋ハ明カニ條約ト牴觸シ一方ハ然ラザルトキハ其牴觸シタル解釋ヲ棄テ、牴觸セザル解釋ヲ取ルベキハ勿論ナレドモ本官ノ見ル所ニ據レバ條約ノ明文中彼ノ五十五條ノ訟訴手續ト明カニ牴觸シタル箇條ナク又反訴ニ關スル何等ノ規定アルナシ唯其第六條ニ訟訴事件ハ公平ニ判決セラレ可シト云フ明文アルノミ而シテ凡英國ノ裁判所ニテハ反訴ヲ許スニアラザレバ公平ノ裁決ヲ望ム可ラス故ニ本官ハ彼ノ第五十五條ノ規則ト牴觸シテ反訴ヲ拒ムベキ條約文ハ敢テ之レ無シト斷定スルモノナリ

左レバ裁判所ニシテ若シ被告ノ反訴請求ヲ正當ト認ムルトキハ規則第五十五條ニ依テ之ヲ許可スベキナリ裁判所ニ許否ノ權アルハ言フマデモナク我々裁判官ガ見テ以テ不當ト認メタルモノハ勿論コレヲ拒絕シテ可ナリ嘗テ當地ニ起リタルホーチヤン號トラツブウキング

號トノ衝突事件ハ甚タ本件ト相似タルモノアリ一方ヨリ反訴ヲ提起シタルトキ互ニ論難攻
撃ノ末遂ニ樞密院ニ上告スルニ至リタルモ當時領事裁判所ニ反訴ヲ許可スルノ權アル事ハ
儘カニ之ガ爲メニ證明セラレタリ而シテ其一方ノ相手ハ支那ノ商船ニシテ軍艦ニハアラザ
リシカドモ本官ハ今回單ニ原告ノ日本皇帝陛下ナルノ故ヲ以テ被告ノ要求ヲ否拒スルノ道
理ナシト信ズ

又嘗テニウバツトル事件ノトキ海事裁判所ニ於テ一時其裁判ヲ中止スルヤ否ヤノ問題起リ
タル事アリシニ一方ノ原告ハ或ル外國ノ帝王ナリシモ其帝王ナルガ爲メニ殊更ニ其道理ノ
アル所ヲ狂グズシテ正當ナル判斷ヲ下シタリ本官ハ是等ノ前例ト道理トニ由リ斷ジテ今回
ノ反訴ヲ受理スルノ權アリト判決ス

次ニ決ス可キハ原告ヲシテ反訴ノ裁判ニ服従スルノ保證ヲ爲サシムル一段ナリ

既ニ反訴ヲ許可スルノ權我々裁判官ニ在ル以上ハ原告ヲシテ其反訴ニ服従ノ保證ヲ爲サシ
ムルノ權モ亦我々裁判官ニアルハ勿論ニシテ訴訟手續第五十五條ハ則チ其權力ヲ規定シタ
ルモノナリ彼ノニウバツトル事件ノ時ノ如キ英國ノ海事裁判所ハ外國主權者ニ向テ公然保
證ヲ爲ス可キ旨ヲ傳ヘタル事アリ此前例ニ照ラスモ我々ガ本件ノ原告ニ對シテ保證ヲ差出

サシムルノ權力アルハ又疑ヲ容レズ

在日本英國領事裁判所ニ於テ日本皇帝陛下ヲ「外國主權者」ト認ムルハ不都合ナリト原告
ハ論ジタレドモ茲ニ「外國主權者」ト言フハ大英國以外ノ國土ノ主權者ヲ意味スルモノニシ
テ在日本英國領事裁判所及ビ其他ノ英國法廷ニ在テ主權者ト云ヘバ則チ英國ノ女皇帝陛下ニ
限り其他ニ主權者アルベカラズ故ニ在橫濱原裁判所ガ日本皇帝陛下ヲ以テ外國主權者ト認

定シタルニハ本官モ同意ヲ表ス斯ク云ヘバトテ本官ハ日本皇帝陛下ニ對シテ不敬ノ言ヲ吐
キ其威嚴ヲ損セシムルモノニアラズ英國ノ宮廷ニテハ各國ノ帝王ニ對シテ其待遇ニ素ヨリ
甲乙ノ區別ナケレドモ我裁判所ニ於テハ大英國ノ女皇帝陛下ヲ以テ其主權者ト認メザルヲ得
ズ若シ此點及ビ其他ノ諸點ニ就テ當裁判所ノ判決ニ誤謬モアラバ更ニ英國樞密院ニ上告シ
テ是正セラレシムコト本官等ノ希望スル所ナリ
陪席判事并ニ本官ハ或ル點ニ於テ多少見解ヲ異ニシタル所アレドモ事實ノ上ニ於テハ全ク
同一ノ判決トス即チ當裁判所ノ判決ハ上告者ノ願意ヲ聞届ケテ當法庭并ニ原裁判所ノ訴訟
入費ハ總テ被上告者ノ負擔ト定ムルモノナリ

第三

右判決ニ由リ彼阿會社ハ我政府ニ對シテ反訴スルイヲ許可セラレ横濱英國領事廳ノ判決
ハ全ク破棄サレタリ而シテ該判決文、諸新聞ノ摘載スル所トナルヤ世論喧シク或ハ此判
決不當ヲ尤メ又我政府ノ處置ヲ批難シ、領海說ヲ唱フル者、反訴問題ヲ論スル者、進テ
英國樞密院ニ上告ス可シト云ヒ、直ニ國際手續ニ依リ内海ノ我領海タルヲ英國政府ニ通
牒ス可シト迫リ紛々囂々定ル所ナシ是ニ於テカ鳩山和夫氏ハ去月九日ヲ以テ錦輝館ニ演
說シ該事件ノ成行ヨリ說キ起シテ上海上等裁判所ノ判決ヲ批難シ領海說、反訴問題一々
之ヲ論究シテ殆ト餘ス所ナシ故ニ我輩ハ當時輿論ノ如何ヲ示スノ煩ヲ避ケ唯タ鳩山氏ノ
演說筆記ヲ掲載スルヲ以テ満足セントス

鳩山和夫氏ノ演說

諸君私ガ今日此處ヲ講究シヤウト云フ問題ハ千島艦トラヴニンナ號トノ衝突事件デアル。

之レニ就テハイロノ問題ガ起ツテ來ルノデアリマスガ、私ガ今時分出テ來テ、大分諸君ガ精神ヲ勞カラシテ居ル場合ニ出テ來テ、細カイ御話シラスル譯デア、其レ故ニ始メカラ御斷リ申シテ置キマス、随分欠伸ノ出ル様ナ場合ニナルカ知レマセンガ暫ラク忍ンデ此問題ヲ吾々ト共ニ講究シテ戴キタイ(謹聽々々)

私ガ諸君ト共ニ講究シヤウト云フ事ハ只今申ス通り衝突ノ訴訟事件デア、其レニ關聯シマシテハ一ツノ訴訟トシテ之レヲ見ル事ハ出來ナイ。國權ニモ關係ヲ及ボシ條約ノ解釋ノ上ニモ影響ヲ及ボス位ノ事件デ在リマスカラ、一ツノ訴訟事件デアアリマスガ其影響ヲ及ボス所ハ甚ダ大キイ、故ニ諸君ト共ニ之レヲ講究シヤウト云フノデア、併シナガラ只其大キイ所バカリヲ摘ミ出シテ無闇ニ悲憤慷慨ノ話シラシテモ矢張纏ラナイカラ此事實ノ全體アラマシデモ宜シイカラ先ツ夫レヲ承知シテ後、夫レカラ其上ニ其内カラ吾々ガ尤モ心痛スル所ノ問題ヲ抜キ來ツテ果シテ横濱ニ於ケル英國ノ裁判、及上海ノ裁判所ガ其當ヲ得タルモノデアアルカ否トイフコトヲ第二ニ申シ上ゲタ方ガ宜カラウト思フ。

先ツ順序ニ依リマシテ横濱ノ件カラ御話シ致シマスガ、此訴ハ日本帝國政府ノ名義ヲ以テ彼阿會社ニ對シテ八十五萬圓ノ損害要償ヲ請求シタルモノデア、其レハ全ク彼阿會社所屬ノラダモンナ號ト云フモノガ航海ノ法則ヲ誤ツテ我ガ千島號ヲ沈没セシムルニ至ツタ、其レ故ニ其ノ責ハ彼阿會社ニアルト云ツテ我ガ政府ノ名義ヲ以ツテ此訴ヘテ起シタノデア、而シテ彼阿會社ハ之レニ答ヘテ曰ク怪シカラヌ訴ヘデア、此損害ト云フモノハ全ク御前ノ船即チ千島號ガ航海ノ法則ヲ誤ツタ爲ニ衝突シタノデア、千島號ハ沈没シタ、我ガ船ガ之レヲ沈没セシメタケレドモ沈没セシムルニ就イテハ拾萬圓ノ損害ガアルト云フ

(笑聲起ル)此拾萬圓ノ損害ヲ日本政府カラ償ツテ貰ハナケレバナラヌト云フ、成ル程衝突デア、ルカラ沈没シタ船ハ無論損ジテ、ラダモンナ號モ亦多少損害ガアツタラウ、即チ沈没セシムル其費用ガ拾萬圓ト云フコトデア、(笑聲起ル)其處デ之レヲ擔ギ出シテ云フニハ先ツ千島號ノ損害ガ八十五萬圓ナラ其レヲ彼阿會社カラ日本政府ニ拂フ可キ責メガアルヤ否ヤト云フ事下同時ニ調ベテ貰ヒタイノハ彼阿會社ガ十萬圓ノ損害モアラン即チ之ハカウシタクレトト云ツテ日本ノ詞デ謂フト反訴ト云キモノデア、日本政府ニ對シテ十萬圓ノ反訴ヲ彼阿會社ガ起シタモノデア、ソコデ彼阿會社ノ提出シタ所ノ裁判所ニ對シテノ申請ヲ細カニ申スト、先ツ第一ニハ此衝突ハ千島號ガ不當ナル航海ヲ爲シタガ爲メニ起ツタモノデア、第二ニハ彼阿會社ハ只今云フ通り十萬圓ノ損害ヲ其爲メニ被ムツタ。ソコデ此十萬圓ノ損害ヲ日本政府カラシテ償バシムルト云フノ請求ヲ茲ニ於テナス。其レト同時ニ日本政府ヲシテ英國ノ裁判所ガ命ズル所ノ——此事件ニ就イテ命ズル所ノ命令通り服従シ而シテ英國裁判所ノ爲ス所ノ裁判ヲ異議ナク執行スルト云フ請求ヲ出セト、斯ウ云フ命令ヲシテ貰ヒタイ。又第三ニハ此彼阿會社ノ請求ト日本政府カラ係ル請求トハ同時ニ合併審理シテ貰ヒ度イト云フ。コウ云フ請求ヲ出シタ、日本ノ政府ヲ代理シテ居タ所ノ辯護士先生ノ答ハ此反訴ト云フモノニハ應ズ可キモノデナイ其理由トシテ曰ク第一此反訴ト云フモノヲ彼阿會社ガ起シテ來ルノハ英國ノ領事裁判手續ノ第五十五條ニ依テ提起シタモノデア、此五十五條ニ云ツテアル所ノ所謂「外國人」ト云フ文字ノ中ニハ日本人ハ包含セラレテ居ラヌ、此五十五條ノ事ヲチヨット申シマスガ、外國人ガ英國ノ裁判所ニ於テ訴ヘラ爲ス場合ニハ其外國人ニ對シテ反訴ヲ爲スコトガ出來ルト云フ規定ガ五十五條ニアル。日

本政府ノ代理者ノ曰ハク其ノ外國人ト云フ中ニハ日本人ハ這入ツテ居ラナイ。其レカラ第一
 二ニハ假リニ此ノ外國人ト云フ中ニハ日本人ガ這入テ居ルト——包含シテ居ルト假定シテ
 モ日本ト英國トノ條約ガアツテ其五十五條ハ條約ニ抵觸スルカラ無効デアルト云フコトヲ
 謂ツタノデアアル。第三ニハ之レハ少シ説明シナイト分カリ惡クイカ知レマセヌガ斯ウ云フ
 事ヲ云フタ日本ノ皇帝ハ侵カス可カラザルモノデアアル。其皇帝ガ原告トナツテ訴ヘテ起シ
 タノデアアルカラ此侵カス可カラザル日本皇帝ニ對シテ反訴ハ起ス可キモノデナイ。其レカ
 ラ第四ニ此事件ニハ衝突ノ起ツタ場所ノ法律ヲ適用シナケレバナランノデアアル衝突ノ起ツ
 タ場所ノ法律羅匈語テリツキスロウサイ即チ場所ノ法律ヲ用ヒナケレバナラヌ。其譯ハ衝
 突ノアツタ場所ト云モノハ内海デアリテ、日本ノ領海デアアル。而シテ日本ノ法律ニ由テ見
 ルト天皇陛下ニ對シテ訴ヘテ起スト云フ如キ事ハ勿論出來ナイ事デアアル。其レ故ニ反訴ト
 云フモノヲ起ス事ガ出來ヌ。此事ハ今迄外國文ヲ讀キナカッタ所ノ人ハ夢ニモ考ヘナカッ
 タ事デアラウト思フ、何トナレバ我皇帝陛下ノ名義ヲ以テ訴ヘテ爲スト云フ如キ事ハ曾テ
 新聞ニ出テ居ナイ事柄デアアル。又吾々ガ此事ヲ聞タナレバ何トカ之ニ就テ考テ起シテ默
 ツテハ居ナカッタデアラウト思フ。然ルニ皇帝陛下ノ名義ト云フモノハドウ云フ譯カ外國
 新聞並ニ裁判所ノ筆記ニハ現ハレテ居ル。又日本ノ代理者ガ此抗辯ヲ爲スニ就テハ憲法ノ
 個條ヲ引イテアル。天皇ハ侵カス可カラズト云フ個條ヲ引キ來ツテ居ル。ソウナルト代理
 者モ矢張日本政府ト云フ名義デ訴ヘテ起シテ置キナガラ日本政府即チ日本皇帝陛下ト云フ
 趣意ノ解釋ヲシタカノ様ニ思ハレマス。之レハ今事實トシテ申シテ置イテ後ニ批評スル所
 ガアラウト考ヘマス、之レ丈ケ四ツノ議論ヲ提出シテ反訴ノ許ルス可カラザル所以ヲ日本

政府ノ代理者ト爲ツタ所ノカーキード始メ外ノ人ハ云ツタノデアアル。之レニ對スル橫濱ニ
 於ケル英國裁判所ノ判決ハ第一第二ト云フモノヲ一所ニシマシテ夫ノ訴訟手續ノ第五十五
 條ト云モノト中ニ「外國人」ト云フ詞ガアル其外國人ト云フ詞ガ果シテ日本人ニ適スルヤ
 否即チ日本人ヲ包含スルヤ否ヤト云フコトハ研究スル必要ガナイ。其譯ハ此訴ヘト云フモ
 ノハ日本皇帝陛下ガ訴ヘテ起シタノデアアル日本人民ガ訴ヘテ起シタノデナイ即チ外國人ト
 云フ詞ガ第五十五條ニ遣フデアアルノハ臣民ヲ指シタ詞デアツテ。他ニ對シテ一國ヲ代表ス
 ル皇帝ヲ指シタモノデナイカラ此五十五條ノ規定ノ中ニハ日本人ト云フモノガ包含スルト
 否ト云フコトハ最早研究スル必要ガナイト云ツテ此問題ヲ投ゲテ仕マツタ。從テ第一第二
 ノ抗辯ト云フモノハ夫レデ潰レタノデアアル。又第三ニコウ云フ事ガアル前ニハ少シハツキ
 リ謂ハナカッタガ第三ノ抗辯ハ日本皇帝陛下即チ原告ハ侵カス可カラザル意義ガアル。其
 レデ英國裁判所ニ於テ皇帝ト稱スルハ即チ日本皇帝陛下デアアル之レニ對シテ英國裁判所ノ
 曰ク英國裁判所ト云フモノハ英國皇帝ノ外ハ皇帝トイフモノヲ知ラナイ。其他ノ者ハ皇帝
 デアルナレバ其ハ外國ノ皇帝デアルト。之レハドウモ當リ前ノ詞ノ様ニテヨツト聞ケルノ
 デアル之レヲ反對ニ致シテ日本ノ裁判所ニ持ツテ行テ只單ニ皇帝ト稱スル場合ニハ英國ノ
 皇帝デアアルゾ日本ノ皇帝ノ事デハナイゾト云フ事ヲ云フテモ日本ノ裁判官デモ之レハ承知
 センデアラウト思フ。其レハ日本ノ代理者ガ英國ノ裁判所ニ居ナガラ單ニ皇帝ト稱スルハ
 日本國皇帝デアツテ外國ノ皇帝デナイ、之レニ對シテ自分達ハ英國ノ皇帝ヨリ外ハ皇帝ヲ
 知ラヌト云フ答ヘテシタ第一第二第三ノ抗辯ト云フモノハ凡テ立タヌノデアアル。ソコデ第
 四ノ點ハ即チ衝突ノ場所ガ日本海ニアツタノデアアルカラ日本ノ法律ニ從ツテ此裁判ヲシナ

ケレバナラヌモノデアル。横濱ノ裁判所ハ先ヅ衝突ノ起リタル場所ノ事ヲ述ベ。夫レカラ其ノ次ギニハ日本ノ法律ハドウ云フモノデアルト云フコトヲ調ラベ。衝突ノ起タル場所ニ就テハ原告被告争ヒナライノデアル只例ノ三哩ト云フ方ノ國際公法ノ規定カラ云ツテモ。陸カラ三哩以内ノ場所デアルト云フ事ハ双方共異議ガナイ又其衝突ノ場所ガ内海デアルト云フコトモ双方ガ異議ガナイノデアル。而シテ其内海ト稱スルノハ外海カラ這入ル口ガ四ツアル。日本人ノ吾々ハ別段聞カナクテモ知テ居リマスガマア英國裁判所ノ云フ詞ヲ以テスレバ。内海ニハ這入リ口ガ四ツアル其二ツハ極狭マイ。他ノ二ツノ内デ一ツノ方ハ凡ソ三哩以下デアル。又他ノ一ツト云フモノハ枝ガ二ツニ分カレテ其廣イ方デスラモ僅カニ四哩以下デアル。コウ謂フ事ヲ裁判所ガ認メテ然ル上ニ此事實カラ行ケバ衝突ノ場所ガ日本領海ノ中デアルトイフコトハ論ヲ俟タヌ。コウ云フ事ニテ横濱ニ於ケル英國裁判所ハ極メタノデアル乍併横濱ニ於ケル英國裁判所ト云フモノハ内海全體ハ日本ノ領海デアルトイフコトヲ極メタカ又其衝突ノ格段ナル場所ガ四國カラ三哩以内ノ距離トイフ所カラシテ日本領海トイフ事ヲ極メタカ。夫レハ判決文中ニナイカラ判カラナイ。願フニ横濱英國裁判所ハドチヲノ點ヨリ考テモ即チ三哩トイフ側カラ考テモ亦内海ト云入口ノ狭イト云フ點カラ考テモ。如斯何ヅレノ點カラ考テモ日本領海デアル。即チ衝突ノ場所ハ日本領海ト考ヘル。之レガ先ヅ公平ノ解釋ラシク思ハレマス。

之デ先日本ノ勝利ニ歸シテ反訴ハ許ルス可カラズト云フ決定ニナツタ、夫レハドウカト云フニ日本ノ土地ニ於ケル衝突デアル以上ハ日本ノ法律ヲ以テ規定シナケレバナラヌ。此日本ノ法ト云フモノハ英國ノ裁判所ガ之レヲ知ル可キ筈ガナイカラ。日本ノ法律ニ精シキ人

ニ問ヒ合セテ。日本ノ法律ヲ知ツタノデアル。ソコデ即チ大學ノ教授デアル穂積陳重君ガ引合ニ出タ。日本ノ法律ヲ明ニスル爲メニ英國ノ裁判所ハ穂積陳重君ノ意見ヲ問フタ其穂積陳重君ノ意見ニハ。天皇ト云フモノハ侵ス可カラザルモノデアル天皇ガ命ジ給フ臣下ニ假令過失ガアラウトモ其過失ノ責ハ天皇ニ歸ス可キモノデナイ。即チ天皇ト云フモノハ御自身ノ名義デアツテモ。亦天皇ノ責任ガナイ名義ニアツテモ決シテ訴ヘテ受ク可キモノデナイト云フ事ヲ穂積陳重君ガ云テ送ツテヤツタ。横濱ニ於ケル英國裁判所ガ其穂積陳重君ノ意見ヲ以テ日本ノ法律ハ如斯デアルト信ジテ此訴ヘト云フモノハ。即チ此反訴ト云フモノハ若シ之レヲ許ルストナレバ取りモ直サズ彼阿會社ヲシテ天皇陛下ニ對シ奉テ訴ヘテ起スコトヲ許ルスト云フコトニナル。夫レハ日本ノ法律ガ許ルサヌ。而シテ衝突ノ場所ハ日本海ニアルト云フコトニ。コウ云フ様ニ順序ヲ經テ遂ニ彼阿會社ノ反訴ノ請求ト云フモノハ之レヲ許サント云フコトニ決定シタ即チ領海問題ノ起テ來タノハ全ク此處ニアルノデアル其レニ就イテ彼阿會社ハ上海ノ控訴院ニ控訴致シマシタ。此處ニ於テ双方争ツタ所ノ點ハ第一審ニ於ケル場合ト同シ事デアル。即チ反訴ヲ起スコトヲ得ルト云フ彼阿會社ノ代理者ノ説ト云フモノハ。反訴ハ訟訴手續ノ第五十五條ニ由テ之ヲ許シテアル。即チ英國裁判所ハ樞密院令ト又樞密院令ヲ出ダスコトヲ許ルシタ英國巴力門ノ法律ト。夫レカラ此ノ樞密院令ニ基イテ出來タ訴訟手續。此三ツニ於テ英國裁判所ハ支配セラル、モノデアル。其五十五條ニ於テ反訴ヲ提起スルコトヲ許ルシテアルカラ反訴ハ宜ロシイト云フ議論デアル。イマーツニハ衝突ノ場所ガ日本領海デハナイ。之レハ外國船ガ自由ニ往來スルコトノ出來ル通路デアルト。コウ云フ如ク申立テ既ニ通路デアル以上ハ假令三哩以内デモ構ハヌ。ト

コウイフ事ヲ申シタ。其例ノ一ツハ英國ノサキソニヤト云フ裁判所デアアル。此レハ極英吉利ノ側ノアキルフワイート云フ島ノ近傍ニ起テ訴訟事件デ。陸カラ三哩所デハナイ最ツト極近イ所ニ起ツタ衝突事件デアアル此場合ニ於テ英國裁判所ガ其格段ナル場所ハ通路デアアル。外國船ハ勝手ニソコノ處ヲ通ルコト出来ル場所デアアルト云フ事ニ判決致シタノデアアル。其判決ノ據ル所ヲ謂フト餘リ長クナルカラ只夫丈申シテ置ク。之ニ依テ見テモ三哩ト云フ事柄ハ國際公法デハ陸ト同ジ様ニハ見テ居ラナイ。外國船ガ自由ニ來往スル事ノ出来ル場所ト云フモノハ。其國ノ領地以外ト云フ例ヲ舉ゲタ尙其外ニモ裁判例ガ澤山御座リマスガ其レハ大分クダクシイカラ此處デ省キマス。而シテ日本政府ノ代理者デ在ツタカークード氏始メ外二名ガ上海裁判所ニ於テ云ツタ議論ト云フモノハ横濱ニ於テ此人達ガ述べタ所トハ少シモ違フテ居リマセヌ。即チ五十五條「外國人」ト云フノハ日本人ヲ包含シナイ。假リニ包含シタトシテモ——若シ包含シテ居ルトスレバ條約ニ抵觸スルカラ夫レハ無効デアアル。又日本ノ天皇ハ侵カス可カラザルモノデアアルカラ。此御方ニ對シテ訴ヘテ起ス事ハ出来ヌ。第四場所ハ日本ノ領海デアアルト此レ丈ケノ事ヲ申シ立タ。然ルニ横濱ノ裁判所ト云フモノガ只今謂ツタ通りニ日本代理者ノ云ツタ如ク一二三ト云フモノハ棄テ、ソコデ第四即チ衝突ノ場所ハ日本領海デアアル。即チ日本法ヲ以テ此訴訟ハ裁判シナケレバナラヌ。日本ノ法律ニ由レバ天皇ニ對シテ訴テ起スト云フ事ハ出来ナイ。其レ故ニ反訴ハ出来ナイト斯フ云フ裁判デ在ツタ。其レ故ニ上海裁判所ニ置キマシテ先ヅ審理スベキ事柄ハ衝突ノ場所ガ果シテ日本領海デアアルヤ否。ドウシテモ此事實ガ日本領海ニアルト云フ事ニ極リマヌレバ從ツテ其次ギニハ日本ノ法律ハドウデアアルト云フ事モ調ベナケレバナラヌ。此点ニ

於テ上海裁判所ハ衝突ノ場所ハ日本領海デナイト極メタムデアアル。斯様ニ極メタ所ノ理由ハ尤モ可笑シイ。其理由ハ支那カラ亞米利加ノ西ノ方ノ端ニ往ク所メ總テノ郵便汽船即チ郵船ト云フモノハ皆ナ内海ヲ通ツテ行クト云フコト。今一ツハ歴史上内海ト云フモノハ外國ノ通路デアアルト云フ所カラ。其歴史上ト云フ事柄ノ内ニ例ノ下ノ關一件ヲ引キ來ツテ。下ノ關ニ於テ日本ノ政府ガ外國船ノ通行ヲ差止メタ其時ニ英國佛國和蘭國亞米利加ノ四ヶ國ガ之レニ對シテ苦情ヲ謂ツテ。トウ／＼砲撃シテ通サント云フノヲムリヤリニ通ツテ仕舞ウタ此二ツノ事カラシテ内海ト云フモノハ外國船ノ勝手ニ通行スル事ノ出来ル場所デアアルト斯文極メテ仕舞ウタノデアアル。夫レカラ今ノ反訴ト云フモノハ問題デ。場所如何ニ拘ハラズ反訴ノ當否ト云フ事ニ就イテ曰ク此原告ハ自分任意ニ英國裁判所ニ訴ヘテ起シタモノデアアル。此任意ト云フ事柄ニ尤モ多ク力ヲ置イテアル。原告ハ任意ニ英國裁判所ニ訴ヘテ起シテ救済ヲ仰グモノデアアル。然ラバ英國裁判所ニ來ナイ内ハ兎ニ角一旦英國裁判所ニ這入テ而シテ救済ヲ求ムル以上ハ英國ノ法律ニ從ハナケレバナラヌ者デアアル。英國ノ裁判ニハ服從シナケレバナラヌモノデアアル。即チ反訴ノ如キ手續ハ英國ノ法律ニ由テ規定セラレテアルモノデアアルカラ。此裁判所ニ訴ヘテ來ル以上ハ此裁判所ノ手續キヲ履マナケレバナラヌ。第三ニ第五十五條ノ手續。五十五條ハ日本ト英國ノ間ニ結ンデアアル條約ト抵觸シナイト云フコウ云フ意見ヲ述べタ夫レテ遂ニ反訴ト云フモノハ許ルス可キモノデアアルト云フ決定ヲ爲シマシタノデアリマス。此レ丈ケガ今日迄ノ順序デアアル。其處デ今世間ニ於テ八釜敷問題トナリマシタノハ。内海ト云フモノヲ以テ日本ノ領海デナイト認メラレタ。此一ツガ尤モ世間デ八釜シク云フシ。又謂ツテ宜ロシイ事柄デアアル。乍併私ハ夫レト問題

ハ、大小ヲ比ラ、ベル事人出来ナイ、事ニ由ツタラ、其レ、ヨリ、尙重大ナル問題ハ、内海ハ日本領海デナイト云フ事ヲ英國裁判所ガ云ツタ丈ケノ事柄ヨリハ、尙大キイ問題ハ、反訴ノ問題デアルト思フソレハ此反訴ノ問題ハ解釋ニ由テ大イニ條約ニ影響ヲ及ボシテ來ル。而シテ此反訴ト云フモノハ判決ノ所謂主文ニ包含セラレテ居ル事柄デアツテ、此英國ノ裁判ガ此儘アル時ニハ現行條約ノ法權ニ關スル所ノ部分ト云フモノハ殆ンド消エテ仕舞ウ位ノ有様ニナラウト思フ(拍手喝采)夫レ故ニ今ノ領海問題ノ事ハ私ハ極簡單ニ述ベテ置キマス。且領海問題ニ就テハ只今高田君ガ精密ナル話ガアツタ様デアルカラ此レニ讓テ私ハ極簡單ニ之レ丈ケノ事ヲ云ツテ置カウト思フ

英國裁判所ハ此内海ヲ日本ノ領海デナイト云フ理由ハ、支那カラ亞米利加ニ行ク所ノ船ト云フモノガ何時デモ此場所ヲ通ル。此事ハ相手ガ申立タ事デナイノデアアル。又立證シタ事柄デモナイ。英國ノ判事即チ此裁判ヲシタハンチントン云フ先生ハ元横濱ニ居タ人デアアル此ハンチンハ横濱ニ居タカラ内海位ハ成程一度二度位通タツ事ガアラウ。ソコデ自分ノ經驗カラシテ支那ヨリ亞米利加ニ行ク船トイフモノハ何時デモ此處ヲ通ルト勝手次第ノ事ヲ自分ノ腦裡カラ編ミ出シテ書イタノデアアル(拍手大喝采)然ルニ之レハ丸デ間違デアアル。支那カラ亞米利加ニ往ク船ト云フモノハ決シテ内海ヲ通ラナイノデアアル。其レガ事實デアアル内海ヲ通ル船ト云モノハ長崎ニ寄港シ。若クハ馬關ニ寄港シ。神戸ニ寄港シ。横濱ニ來ル少チクモ神戸ト横濱ニ用ノアル船ハアノ海ニ這入ツテ來ルソウデナクシテ横濱神戸ニ用ノナイ商船ト云フモノハアノ外ノ方ヲ通りテ亞米利加ニ直行スルノデアアル。此事實ト云モノハ確カニ記憶シテ置カチケレバナラス。即チ無闇ニ此内海ト云フモノハ外國船ガ通り抜ケテ

スル場所デナイノデアアル。日本ニ用ガアルカラ即チ神戸ニ寄港シテ荷物ヲ下ロシ。若クハ積ムト云フ事ガアルカラ内海ニ這入テ來ル之レハ明カニ條約ヲ以ツテ日本政府ガ許ルシテ居ル。長崎神戸横濱ハ例ノ五港ノ一トシテ條約デ以テ此處ニ這入テ來ル事ヲ許シテアルカラ。用ノアル時ハ這入テ來ル併シ乍ラ若シ我が政府ガ許サチケレバ這入テ來ルヲハナイノデアアル。然ルニ此ハンネン判事ト云フ者ハ支那カラ亞米利加ニ往ク時ハ何時デモ此處ヲ通ル者デアルト云フコトハ誰モ言ハナイ。原告モ被告モ言ハナイ。證據立テノ時分ニ於テ誰自分ノ頭ヲスウ云フコトヲ持ツテ來テ裁判書キノ中ニ加ヘタ(拍手大喝采)而シテアスヨハ外國ノ船舶ガ自由ニ來往スル場處デアルト云フコトヲ事實ニ據ラズ何ニモ據ランデ唯自分丈デ極メタメデアアル。斯ウ云フコトハ日本ノ訴訟ニ慣レテ御出デノ御方ハ勿論大審院杯デハ直グ破棄シテ仕舞ウ。

又第二ノ理由ハ下ノ關ノ事。歴史上内海ハ外國船ガ自由ニ來往スル事ト云フハ歴史的著名ノ事實ナリト云フコトガ判決文ニ書イテアル。然ルニ下ノ關ノ事柄ト云フ者ハ極近代ノ事デ敢テ私ガ此處デ繰返ス迄モゴザリマセヌガ當時内海ニ外國船ガ這入テ來ル。ソコデ此處ヲ外國船ノ通路ニセラレテハ困ルト云フ處カラ外國船ヲ砲撃シタ。ソレハ此處ヲ通サント云フ主義カラ出タ者デモナイ。又其局ヲ結ブニ當ツテモ將來外國船ノ通路トスルト云フコトヲ日本政府ガ承諾シタコトモ何モナイ。下ノ關ノ事件ノ起ツタ時ハ舊幕時代且ツ外國船ニ向ツテ砲撃シタノハ日本ノ大名ノ一カニデアアル。其當時外國船ガ日本ニ來タ時即チ下ノ關ニ來タ時ハ恰度陸カラ近イ處ヨリシテ其處デ砲撃ニ出遇フタ丈ケノ話。外國船ヲ砲撃スルニハ極便利ナ場所デアアルカラ遣ツタノデアラウ。夫故ニ一方ハ通行權ガアルト謂ヒ一方

ハ通行權ガナイト謂ヒ、或ハ一方ガ負ケタト云フ如クニ書イテアル。是レハ渠レガ歴史ヲ讀ミ誤ツタノデアアル。兎ニ角普通ノ目鑑デ歴史ヲ觀ル人ハケ様ナ見方ハシナイ。而シテハンチン判事ノ言フ如キ證據ハ元來ナイノデアアルカラ今日迎モ一ツモ遺ツテナイ。左スレバ此日本海——内海ト云フ者ハ日本ノ領海デナイト云バンネン判事ノ據リ處ト云者ハ直グ崩レテ仕舞フノデアアル即チ此判決ノ事實ハハンネン判事ガ自分ノ腦裡ヨリ勝手ニ編ミ出シタ事實即チ自分ガ亞米利加ニ往ク時通ツタカラ凡テノ船モ皆アスコヲ通ルト云フ事實是レハハンチン獨リノ考ヘデ、サウ云フ事柄ハ固ヨリナイノデアアル。マア第一ニ迂回シナケレバナラヌ路デモアルシ且殊ニ危險デアアル。内海ハ御承知ノ通り小サイ島ガ澤山アル。淺瀬ガアル、夫故外國船ガ往來スルニハ是非共水先案内ヲ附ケナケレバナラヌ。水先案内料モ取ラレルシ保險料モ高イ、又石炭モ餘計要ル。ソレデ近路デアアルカト云ヘバ却テ遠路デアアル。此ノ如キ處ガ普通ノ通路ト云フコトハ決シテナイ。ソレヲハンネン判事ガ自分ノ腦裡カラ勝手ニ編ミ出シタカラ不當ノ判決ヲ爲スニ到ツタ、決シテ此ノ如キ事實デ正判決ノ出來ル者デナイ。第二ニハ渠ハ歴史ヲ讀ミ誤ツテ居ル。此二ツニ據ツテ内海ハ日本ノ領海ニ非ズト云フコトヲ裁判官ガ認メタノデアアルカラ其判決ノ間違切ツテ居ルト云フコトハ少シ事理ヲ辨ズル者ニハ直グ分ルノデアアル。夫故英國ノ樞密院ニ於テハ此裁判ヲ翻ヘスデアラウト私ハ考ヘル。サキソニヤノ裁判例ト云フ者ハ決シテ本件ニ之ヲ適用スルコトハ出來シ。即チ英國ノ法律ニ由ツテ見テモサキソニヤノ事件ト云フ者ハ此事件ト場合ガ違フ。サキソニヤノ場合ト云フ者ハ即チ彼處ハ英國ノ直ギ近傍デアアルガ併ナガラアスコハ外國船ノ勝手ニ通行スルコトノ出來ル場處デアツタノデアアル。即チ其時判事ノ用ヒタ言葉ノ中ニモサウ

云クコトガ書イテアル。此サキソニヤ事件ノ衝突ノ場處ハ英國ノ法律ヲ以テ制スルコトノ出來ナイ則チ外國船ガ勝手ニ來往スル場處ニ於テ起ツタデアアルカラシテ從ツテ是レニハ英國法律ヲ適用ス可キモノデナイト云フコトニ爲ツテ居ル。縱令陸カラ三哩以内デアツテモ其場處ハ外國ノ船舶ガ自由ニ來往スル場處デアルト云フノガ即チサキソニヤ事件ノ事實デアアル。其事實ト此度ノ事實即チ外國ノ船舶ガ勝手ニ來往スルコトノ出來ヌ場處ニ起ツタ事トハ事柄ガ違フ。故ニサキソニヤノ判決例ヲ以テ本件ノ判決例ト爲スコトハ出來ヌンデアアル(拍手喝采)

猶反對ノ點ニ就テ上海ノ裁判所ヲ攻撃シヤウト思ヒマスガ。此裁判ノ間違ツテ居ルト云フニツノ點ハ日本皇帝陛下ガ任意ニ英國ノ裁判所ニ訴ヲ起シタ以上ハ——自分ノ勝手デ英國裁判所ノ救濟ヲ仰グ爲ニ英國裁判所ニ訴ヘタ以上ハ凡テ英國ノ法律ヲ遵奉セネバナラヌト謂フ。抑モ是レガ間違ツテ居ル。此誤リト云フ者ハ此カラ來タノデアアル。嘗テ英國ニ於テ白耳義ノ國王ガ矢張衝突事件ニ就テ訴ヲ起シタコトガアル。其時ニ一方カラ反訴ヲ提起シタ。是レガニユーバトルト云フ判例ト思フ。其時ニ英國裁判所ハ反訴ヲ許シタ。其時ノ裁判ニ原告ガ任意ニ英國裁判所ニ來ツテ救濟ヲ求ムル以上ハ其裁判所ニ於ケル訴訟手續ハ凡テ遵奉シナケレバナラヌト云フコトガアル。英國裁判所ハ或ハ此判例ノ爲ニ迷ツタノデアアラウト思フ。併ナガラ白耳義ノ國王ガ訴ヲ起シタ場合ト今回ノ如クニ日本政府ガ訴ヲ起シタ場合トハ違フノデアアル。何トナレバ白耳義ト英國トノ間ニハ治外法權ノ條約ハナイノデアアル。白耳義ノ國王ガ英國裁判所ニ訴ヲ提起シタト云フノハ全ク任意、都合ノ上カラ訴ヲ起シタノデアアル。白耳義ノ國王ト云フ者ハ英國ノ裁判所ニ訴ヘズシテ猶他ノ裁判即チ我地方

ノ裁判所ニ訴フルコトガ出來タノデアアル。然ルニ其レヲ棄テ、英國裁判所ニ訴ヲ提起シタ、即チ自分ノ都合デ英國裁判所ニ訴ヲ起シタ。夫故ニ英國裁判所ノ手續等ハ凡テ遵奉シナケレバナラヌト云フコトデアアル。併シ此度ノ訴ハサウデナイ。日本國政府ト云フ者ガ日本ノ裁判所ニ訴フルコトモ出來ル、然ルニ英國ノ裁判所ニ訴フルコトガ出來ルカラト云フノデ英國裁判所ヲ選ンダト云フ如キ場合デハナイ。日本國政府ハ今回ノ衝突事件ニ就テハ訴ヲ起サントスレバ英國裁判所ニ訴フルヨリ外途ガナイノデアアル。勝手ニ自分ノ都合上英國ノ裁判所ヲ帝國政府ガ選ンダト云フノデハナイ。夫故ニ自分自カラ進ンデ其裁判所ニ來ル者ハ無論其裁判所ノ手續ヲ遵奉シナケレバナラヌト云フ論理ハ決シテ此場合ニ當テ符ラレンノデアアル。第二ニ上海ノ裁判所ノ判決ハ其當ヲ得ナイト云フハ外デハナイ。ソレハ判決文ニ在ル如クニ此反訴ヲ許スヤ否ヤト云フコトハ英國ノ法律ト樞密院令、樞密院令ニ基イテ出來タ裁判所ノ手續、是ニ由テ判決スル外ハナイト斯ウ云フコトガ明カニ書イテアル。是レが大ナル間違デアル。何トナレバ英國人同志ノ訴デアアルナラバ英國ノ法律ノミニ由ツテ反訴ヲ許ス可キヤ否ヤト云フコトヲ定ムルハ勿論ノ事デアアル。併ナガラ日本人ガ英國人ニ對シテ訴ヲ起ス場合ニハ先ヅ第一ニ條約面ニ據ラナケレバナラヌノデアアル。英國ノ法律デモ樞密院令デモ苟クモ此條約ト抵觸スル所ノ者ハ日本人ニ對シテハ凡テ無効デアアル。然ルニ上海ノ裁判所ハ英國法ト樞密院令トニ因テ判決ヲ爲スノ外ナシト云フコトヲ判決文中ニ掲ゲテアル。又サウ云フ考ヘデ裁判ヲシタレバコソ今度ノ如キ間違ヲ惹起シタノデアアル。第一ニ據ル可キ者ハ兩國間ノ條約デアアル。此條約ガナケレバ英國ノ裁判所ハ日本人ニ對シテ訴ヲ審理スルコトガ出來ル出來ナイト云フコトハ分ラナイノデアアル。即チ英國人ト日本人

ト交渉シテ居ル事件ニ就テノ其裁判管轄ハ條約ニ因テ定マルノデアアル。英國ノ法律、英國ノ樞密院令ハ條約ガ出來テ其條約ヲ履行スル爲メニ拵ヘタ法律デアアル。法律並ニ樞密院令デアアルノデアアル。故ニ其基礎タル條約ト抵觸スル者ハ威ナ無効デアアル。此議論ハ私ガ新タニ言フ迄モナク英國ニ於テハ條約ト法律ト抵觸スル場合ニハ條約ガ法律ニ優ツタ効力ヲ有ツト云フ判決例ハ幾ツモアル。此點ニ就テハ苟クモ英國法ヲ學ンダ者ハ其日本人タルト外國人タルト問ハズ少シモ異議ノナイ點デアアル。條約ト法律ト抵觸スル場合ニハ條約ノ方が優等ナル効力ガアルト云フコトハ最ウ極ツテ居ル。然ルニ英國裁判所ハ唯單ニ英國法ト樞密院令ニ因ツテ判決ヲ爲シタト云フ不當ガアル。然ラハ條約ハドウ爲ツテ居ルカト云フニ日本ト英國トノ間ニ結ンダ條約、又日本ト奧太利、匈牙利其他ノ國ト結ンダ條約ニ由ツテ見テモ英國ノ裁判所ハ日本人ガ被告デアアル場合ニハ判決ヲ爲スベキ權限ヲ持ツテ居ラヌノデアアル。英國ト日本トノ間ニ結ンダ條約ニハ餘程奇態ナ文字ガ用キテアル。即チ裁判ト云フ如キ文字ハ少シモ用井テナク。日本人ト英國人トノ間ニ交渉ガ起ツタ場合ニハ先ヅ日本人ハ英國領事ニ申し出デ而シテ英國領事ハ篤ト説諭ヲ加ヘテ成ベク公平ニ平和ノ局ヲ結ブヤウニ盡力シナケレバナラヌト云フ如キ條約ガアルノデアアル。即チ平和ニ局ヲ結ビ公平ナル局ヲ結フヤウニ盡力スルト云フ事柄ガ書イテアツテ裁判ノコトハ明カラニ書イテナイ。然ルニ其他ノ條約ニ在リマシテハ明カニ被告人ト爲ル者ノ國籍ニ因ツテ裁判管轄ガ定メテアル。而シテ英國ハ所謂最惠國條疑ニ因テ日本ト他ノ國トノ間ニ結ンダ其條約上ノ權利ヲ得テ因ツテ以テ領事裁判今日デハ領事ノ外ニ裁判所ヲ置イテ英國ガ裁判權ヲ得タヤウニ爲ツタ。夫故ニ英國トノ條約丈ケヲ見テモ亦他ノ國トノ條約ヲ見テモ凡テ裁判管轄ト云フ

者ハ被告ノ國籍ニ因テ定マル者デアルト云フコトハ疑ヒナキ實事デアアル。條約文其者ヲ讀
 シテ見レバ誰カ看テモサウシカ見エナイ。然ルニ今反訴ヲ許スト云フコトニナルトドウデ
 アル。反訴ト云フハ詰リ日本政府カラ八十五萬圓ヨコセト云ヘバイヤ八十五萬圓ハ遣ラナ
 イ。十萬圓コチラニヨコセト云ツコトデアアル其十萬圓ヨコセト云ツタコトテ訴フル者ハ英國
 人デ訴ヘラル、被告人ハ日本政府デアアル。然ラバ條約面ニ由テ被告ノ國即チ日本ガ之ヲ裁
 判スルト云フコトニ爲ル。若シサウデナイト云フナラバ此反訴ト云フ名義ガアルガ爲ニ矢
 張被告ハ英國人デアルト云フコトニナレバ此言葉ト云フ者ハ全ク意味ヲ失スル。條約ト云
 フ者ハ全ク其精神ヲ失スルニ至ルノデアアル。條約ノ上ニ於テ明カニ被告ノ國籍ニ由ツテ裁
 判管轄ヲ定ムルト云フコトニ爲ツテ居リマスカラ反訴トシテ訴ヲ起シテ日本人ガ被告ト爲
 ル以上ハ英國ノ裁判所ニ於テ之ヲ裁判スルコトノ出來ナイト云フコトハ論ヲ待タヌデアラ
 ウト思フ。是レハ文字ノ上カラ言ツタノデアリマスルガ一二此處デ例ヲ擧ゲテ申マスト
 亞米利加ノ大審院檢事總長デアアル。御承知ノ通り亞米利加デハ檢事總長ハ内閣ニ列スル人
 デ極地位ノ高イ者デアアル。其檢事總長ノ意見ハ殆ド裁判例ト同一ナル効力ヲ持ツノデア
 ルガ其人ノ意見ノ内ニ日本ニ在ル處ノ領事裁判所ト云フ者ハ亞米利加人ガ被告デナイト場合ニ
 ハ管轄權ヲ持タヌト即チ亞米利加人ガ被告人ト成ツタル場合ノミニ管轄權ヲ有スルト云意
 見ヲ述ベテ居ル。

又タ曾ツテ東京府知事ガバチエルダト云フ米國人ニ對シテ訴ヲ起シタ其ノ時ニバチエル
 ダト又タ反訴ヲ起シマシタ。其ノ時ニハガンヴェルレント云フ人ガ亞米利加ノ領事デア
 ツテ其ノ人ハ反訴ハ許ス可カラズト云フ決定ヲ爲シテアル。其ノ理由ハ少シハ違ヒマス。其

ノ人ガ言フニ外國本ガ被告即チ亞米利加人ガ被告ト爲ル場合ニ領事裁判所ガ管轄權ヲ有ス
 ルヤ否ヤト云フ問題ヲ議スルノ必要ハナイ。何トナレバ訴ヲ起ス其人ハ東京府知事デア
 ル。東京府知事ハ一個ノ人民デハナイ。即チ東京府知事ト云フ者ハ政府ノ代表者デア
 ル。政府ト云フ者ハ自分自カラガ同意ヲ與フル場合ノ外ハ決シテ被告ト爲ルベキ者デ
 ナイ。若シ反
 訴ヲ許セバ即チ日本政府ガ被告ト爲ルノデアアルカラ此反訴ハ許サヌト云フ理由ヲ以テ之
 ラ却下シテアル。是レハ亞米利加ノ例デアリマスガ、英國ノ而カモ上海上等裁判所ニ於テ判
 決シタ例デ本案ニ最モ適切ナル裁判例ガ一ツアリマス。英國ト日本トノ條約ト支那ト英國
 トノ條約ハ文意ガ同ジヤウデアアル。ソレデアリマスカラ支那ノ條約ニ就テ英國ノ上等裁判
 所ノ下シタ判決ト云フ者ハ直チニ之ヲ以テ日本ト英國トノ條約ノ解釋ニ適用スルコトガ出
 來ル。是レハ英國ノホウシヤント云フ船ト支那ノ船舶ト衝突シタ場合デアアル。其時ニ支那
 ノ船舶ハ沈沒致シマシタ。ソコデ其所有主ガ條約ニ基イテ英國裁判所ニ訴ヘタ。此訴トイ
 フ者ハ訴訟手續ニ由テ訴ヘタノデナク英國船ノ爲ニケ様ナ損害ヲ受ケタカラシテ其償ヒヲ
 取立テ、貰ヒタイ。領事ト云フ者ハ半分ハ裁判官半分ハ行政官ノ資格是レニ對シテ訴ヘタ。
 支那ト英國トノ條約ニ據ルトケ様ナ場合ニハ支那ノ道台ト云フ者ニ照會シテ而シテ其事件
 ハ成ベク平和ニ公平ニ局ヲ結ブヤウニシヤウト云フ條約ガアル。即チウレニ據ツテ支那ノ
 道台ト英國ノ領事ガ立會ツテ致シタ。全ク英國人ガ惡ルカッタノデアアル。即チ英國船ガ航
 海ノ法ヲ誤ツテ支那ノ船ヲ沈マセタノデアアル。ソレデ英國ノ船舶ノ所有主ニ償金ヲ拂ヘト
 云フコトヲ命ジタノデアアル。此場合ニ英國ノホウシヤンノ所有主ト云フ者ハ是レニ對シテ矢
 張反訴ト云フ如キ性質ヲ以テ却テ支那人カラシテ損害賠償ヲセチバナラヌト云フコトヲ領事

裁判ニ訴ヘタ。其時ノ判決ハ載セテ當時ノ支那ノ新聞即チ英字新聞ノ「スチヤイナヘラル」
 下新聞ニ在ル。此裁判ハ公平ニ誠ニ能ク出來テ居ル。其判決ノ理由ノ一部分ヲ申シマスレ
 バ「英國ノ裁判所ト云フ者ハ英國ト支那トノ間ニ締結シタル所ノ條約ニ基イテ定メラレタ法
 律カラ權限ヲ得テ居ル。條約以外ニハ權限ハナイ。而シテ此條約ノ中ニハ反訴ト云フ如キ
 性質ト云フ者ハ含ンデ居ラナイ。斯ウ云フコトヲ言ツテ隨分長イ判決デアリマスケレドモ其
 判決ノ中ニ只今私ノ言フタコトガ書イテアル。而シテ其外ニ其判決中ニ言ツテアル事柄ハ
 今私ノ言ツタコト、抵觸スルコトハナイ。益々其理由ヲ確メル事柄ガ書イテアル。其時ノ判
 事ハフリンヅエイト云フ人デアアル。此判決例ニ由テ看テモ私ノ只今言フ所ノ意見即チ領事
 裁判所ノ權限ト云フ者ハ條約ヨリ得テ者デアアル。夫故ニ英國ノ法律デモ樞密院令デモ條約
 ヲ履行スル爲ニ拵ヘタ法律デアアル。樞密院令デアアル。其條約ニ抵觸スル者ハ凡テ無効デア
 ルト謂ツテ其法律並ニ樞密院令ニハ効力ヲ與ヘヌデ宜シイノデアアル。今ノ判事ノフリンヅ
 エイト云フ人ハ夫丈ノ勇氣ガアツテ英國人ノ訴訟ヲ却下シタ。是ニ因テ看テモ所謂東洋ニ
 在ル英國人中ニハ適マニハ道理ノアル人ガアルト云フコトガ分ル。此判決ノ成行ニ就テ又
 判決文其者ニ就テ私ノ言ハントスル所ハ大畧是丈デアリマス。併シ此事件ニ就テハ猶此外
 ニ少シ言ツテ置キタイト思ツテ居ルコトガアリマスガ、此事件ハ橫濱ニ於テハ日本政府ノ
 勝利ニ歸シタ。而シテ敗訴シタ所ノ彼阿會社ガ之ヲ上海ニ控訴シタ。又今日ハコチラガ上
 海ニ於テ敗訴シタカラ之ヲ倫敦ニ持ツテ往ツテ樞密院ノ司法部ノ判決ヲ受クルト云フコト
 ガ宜シイトカ宜シクナイトカ云フ事迄ニ議論ガ進ンデ居ルガ。元來條約ノ精神ヲ看ルニ日
 本人ト英國人トノ交渉事件ニ就テ控訴スルト云フ場合ニ或ハ上海ニ往キ或ハ倫敦ニ往ク

云フ事柄其者ハ條約違反デハナイカト思フ。何トナレバ日本ト歐羅巴諸國トノ間ニ結ンダ
 條約ヲ檢閲スルニ日本以外ニ其ノ訴訟事件ヲ持ツテ往ツテ裁判ヲ受クルト云フ如キハ曾テ
 日本政府ガ條約シタリト看ル可キケ條ハ一ツモナイノデアアル(拍手大喝采)若シ倫敦迄往ク
 ト云フコトガ相當デアラナラバ之ヲ事實ヲ換ヘテ言ヘバ佛蘭西人ト日本人トノ交渉事件ニ
 就テ佛蘭西ノ領事裁判所デ日本人ガ勝ツテ佛蘭西人ガ不服ナラバ之ヲ本國迄持ツテ往クコ
 トガ出來ルト云フ考ヘデ締ンダ條約デナイト思フ。若シ果シテサウ云フ譯デナイナラバ日
 本人ノ權利ヲ侵害スルコトハ中々少々ニ非ズト思フ。我々ガ一ノ事件ヲ訴フルニ就テモ其
 事件ガ或ハ長崎ニ廻リ場合ニ因ツテハ函館ニ廻ルコトガアルガ其時ノ訴訟本人ノ迷惑ト云
 フ者ハ一ト方ナラヌ。然ルニ今言フ如クデアレバ領事裁判ト云フ者ハ即チ第一番ノ裁判デ
 若シソレニ不服ノ者ハ倫敦ナリ巴里ナリ彼得爾斯堡ナリ或ハ華盛頓迄皆往カナケレバナラ
 スト云フコトデハ中々容易ナ事デハナイ。ケ様ナ事ハ日本政府ガ條約シタルヤ否ヤ殊ニ條
 約シナケレバサウ云フコトハナイ筈デアアル。尤モ領事ト云フ如キ者ノ判決丈ケデハ公平ヲ
 失スルコトガアリマスカラ或ル点ニ於テハ控訴上告ノ途ノアル方ガ寧ロ日本人ノ利益ヲ保
 護スルト云フ議論モアラウト考ヘル。併ナガラソレハ別問題。條約ニ於テハ明カニ領事裁
 判所ヲ置イテ領事ガ裁判スルト云フコトニ爲ツテ居ル。若シ此領事ノ裁判ガ公平ヲ失スル
 ト云フ事柄ガアルナラソレハ別問題トシテ即チ英國政府ナリ佛國政府ニ向ツテお前ノ國
 ノ領事ト云フ者ハ法律モ知ラヌ、粗漏ナ裁判ヲスル。又場合ニ由ツテハ誠ニ公平デナイ、
 夫故領事裁判丈ケデハ日本臣民ノ權利ヲ保護スルコトガ出來ナイカラ猶然ルベキ裁判所ヲ
 日本ニ置ケト云フ請求ハ何時デモ出來ル(拍手大喝采)必ズシモ上海マデ持ツテ往カナケレ

バナラス、必ズシモ佛蘭西マデ往カナケレバナラヌト云フコトハナイ、唯條約ノ精神ハ日本ニ於テノ出來事ト云フ者ハ日本ニ於テ纏メテ仕舞フ。其裁判ト云フ者ハ日本デスルト云フ事丈ハ條約面ニテ明カデアルト思フ(拍手喝采)然ルニ今度ノ事件ニ就テハ一方カラ控訴シテ是レニクツ附イテ日本政府ハ相手ヲシタ。斯ウ謂フノデアルカラ此私ノ言フ議論ト云フ者ハ少シ遲滞デアル。繰リ言ノヤウデアアルガ併シケ様ナ事件ハ今回一ツニ止マラス。猶日本人カラ外國人ニ對シテ訴ヲ起ス場合ハ幾ツモアル。又日本政府モ起ス場合モアルデアラウ。若シ私ノ議論ガ相當ナラバ既往ハ既往。將來ニ於テハ條約文面通りニ必ズ日本ノ領事裁判ヲ以テ終局ト爲ス。此ニ於テ日本人ガ勝テバ直チニ其通りニ執行スルト云フコト迄ニ往クガ宜シイ。而シテ領事裁判ガ惡ルケレバ矯正ノ方法ハ他ニ求ムル即チ日本ノ領地内ニ於テ法律ニ明ルイ人、金錢ノ爲ニ動カヌ人、地位ノ爲ニ動カヌ人間ヲ判事ニシテ吳レト云フ請求ハ何時デモ出來ルノデアル。(拍手喝采)

先刻領事問題ト反訴問題トハ其間ニ輕重ガアルト云フコトヲ申シマシタガ其旨意ヲ此處デ猶明カニシテ置カウト思フ。反訴問題ト云フ者ガ何ゼ大キイカト云フニ這回ノ英國裁判所ノ判決ニシテ果シテ其當ヲ得タル者トスレバ將來日本政府ガ訴ヲ起シテモ日本人民ガ訴ヲ起シテモ其訴ヲ起ス場合ニ於テ被告カラ直ニ反訴ヲ起スコトガ出來ルト云フコトガ此ニ於テ極マルノデアアル。然ルニ訴訟ト云フ者ハ大抵双方ニ多少ノ申分ガアル。必ズシモ訴ヲ起ス原告ノミガ正理正當デ少シモ瑕瑾ガナイ。被告ハ凡テ邪マナリト極マツテ居ラス。必ズ約束履行トカ損害賠償トガノ訴ガ起ル以上ハ必ズ原被告双方ノ間ニ少々宛ハ議論ガアル。夫故ニ若シ此反訴ガ出來ルト云フコトニ爲レバ從來ハ英國人ガ日本人ヲ被告トスル場合ニハ必

ズ日本裁判所ニ訴ヘルト云フ規定アルニ拘ラズ先ヅ日本人カラ先キニ訴ヘテ起スヲ俟ツテ居ルヤウニ爲ル。即チ日本人ガ訴ヲ起セバ其時反訴トシテヒヨツト請求シテ往カウト云フコトニ爲ル。而シテ反訴ノ範圍ハ何ニ因テ定ムルカト云ヘバ英國ノ法律ニ由テ之ヲ定ムルト云フノデアアルカラ或ハ英國ノ法律ヲ以テ反訴ハ其原因ガ同ジカナケレバナラス。喩ヘバ衝突ニ就テ訴ガ起ツテ居ルトスレバ其外ノ事件ヲ持チ來ツテ遺ルコトハ出來ヌト云フ如ク定ムルコトモ出來ルガ又反訴ナル者ハ對手サヘ同ジデアレバ被告ハ原告ニ對シテ何等ノ原因タルヲ問ハズ喧嘩相手ガ同一ナラバ反訴ヲ許スト云フ如クニ英國ノ法律デ定ムルコトモ出來ル。即チ契約ノ訴ヲ起スニ當ツテ私犯ノ訴ヲ以テ反訴ヲ起スコトガ出來ル。左スレバ從來ハ英國ガ被告ナラバ英國裁判所之ヲ管轄シ又日本ガ被告ナラバ日本裁判所デ裁判シタ者ガ今度ハ凡テノ事ヲ英國裁判所デ裁判スルト云フコトニ爲ツテ來ル。獨リ英國ノミナラズ彌ヨ英國ガソレデ善イトナラバ佛國モ其他ノ諸國モ皆其眞似ヲシテ日本人ガ被告トナツテ居リナガラ英國其他ノ國人ノ裁判ヲ受クルト云フ事柄ニナツテ來ル。從來ハ被告人ノ國籍デ裁判管轄ヲ定ムルト云フコトニ爲ツテ居ルカラ表面ハ公平デアアル英國人ガ被告ナラバ英國裁判所デ之ヲ裁判シ日本人ガ被告ナラバ日本裁判所デ裁判ヲ受クルト云フコトデアルカラ其間先ヅ表面丈ハ權衡ヲ保ツテ居ル。然ルニ返訴ト云フ方法デ訴ヲ起スコトガ出來ルト云フコトニ爲ルト日本人ガ被告ト爲リナガラ英國裁判所ノ裁判ヲ受ケナケレバナラス。即チ從來ハ橫濱地方裁判所デ裁判ヲ受ケタ者ガ今度ハ反訴トシテ英國領事ノ裁判ヲ受ケナケレバナラス。若シ不服ナレバ上海ニ控訴セイト云フコトニ爲ル。夫故若シ此反訴ヲ許スト云フコトニ爲ツテ一度此堤ガ崩ルレバ凡テ今日迄ノ裁判組織ガ崩レテ外國人トノ

交渉事件ト云フ者ハ皆外國人ノ裁判ニ歸スルト云フコトニ爲ルハ憂フヘキコトデアアル(拍手喝采)ソレハ唯杞憂デハナイノデアアル。埃及ニ於テ既ニ先例ガアル。埃及ニテ今日立會裁判ニナル以前ト云フ者ハ凡テ領事ノミガ裁判シタ。此領事裁判ノ弊ハ他デハナイ。所謂反訴テ取消シノ訴ヲ領事裁判ニ起スノデアアル。吾レ訴ヲ起セバ彼ハ反訴ヲ起ス。而シテ反訴ハ縦令百萬磅ト云フ大キナ事件デモ此領事裁判所デ裁判シタ。其執行手續ハ凡テ外交手續ニ因ツテ大威張ニ威張散ラシテ遣ル。埃及デハ此反訴ノ爲ニ苦メラレタ。已ニ斯ノ如キ先例ガアル。此先例ガ我國ニ行ハル、ゴトニ爲ツテ甘ンジテ之ヲ受クルト云フコトニ爲レバ最早外國人トノ交渉事件ニ就テハ日本人ガ原告ト爲ツテモ被告ト成ツテモ自國ノ裁判ヲ受クルコトカ出來ヌト云フ結果ニナル(拍手喝采)此問題ハ現行條約ガ改正セラルレバソレト同時ニ已ム問題デアアルガ其現行條約ガ改正セラレヌ間ハ此大ナル苦惱ト云フ者ハ我々ガ之ヲ受ケナケレバナラヌ。決シテ此問題ハ小サクナイ。此ノ如ク現行條約マデ侵害セラレ、現行條約ノ明文ニ反シテ唯反訴ト云フ名ノミヲ以テ我々ガ被告トナルニモ拘ラズ英國ノ裁判ヲ受ナケレバナラヌト云フコトニナルバ現行條約ハ何時改正セラル、カ殆ンド希望シ難イ(拍手大喝采)今日明カニ書イテアル條約上ノ權利ヲ我々ガ守ルコトガ出來ナケレバ是レヨリ宜イ條約ハドウシテ得ラル、カ又之ヲ如何ニシテ守ル積リデアアルカ(拍手喝采)是レ私ガ此問題ハ決シテ小サクナイト言フ所以デアアル(拍手喝采)

● 第四

以上述ヘタル如ク輿論既ニ喧シト雖モ政府ハ更ニ知ラサル者ノ如ク何ノ爲ス所アルヲ見ス剩ヘ英國樞密院ニ上告スルヤ否ヤモ未タ一定セサルモノ、如シ是ヲ以テ帝國議會ノ開

會スルヤ議員鳩山和夫、角田眞平、丸山名政ノ三氏ハ直ニ政府ニ向テ本件ニ關シテ質問ヲ試ミタリ其質問書ヲ左ニ掲ク

● 千島艦衝突損害要償事件ニ關スル質問主意書

第一 軍艦千島號衝突損害要償訴訟事件ニ付横濱英國領事廷及清國上海英國上等裁判所ニ顯ハレタル事實及右兩所ノ判決文ニ依ルトキハ日本政府ハ 天皇陛下ノ御名ヲ以テ原告タル資格ヲ代表シタルモノ、如シ國ヲ代表シテ訴訟ヲ爲スヘキ場合ニハ當局官吏ノ名ヲ以テスヘキ我國法ノ規定スル所ナリ然ルニ 神聖ニシテ侵スヘカラサル 天皇ノ御名ヲ以テ訴訟ヲ爲シタル手續及理由如何

第二 日本ト英國トノ條約ニ依レハ日本人ガ原告トナル場合ニ於テハ英國領事ノ裁判ヲ受クヘキ事ヲ規定スルノミナラズ其他ノ場合ニ於テハ何等ノ裁判權ヲモ認識セズ然ルニ横濱領事裁判ニ對シ彼阿會社ガ清國上海英國上等裁判所へ上訴シタル場合ニ於テ日本政府ガ之ニ應シ出廷答辯ヲ爲シ條約ニ規定セサル外國裁判管轄ニ服從シタル理由如何
右議院法第四十八條ニ依リ提出候間速ニ當局大臣ノ答辯アラシトテ希望致シ候也

明治二十六年十一月廿九日

提出者

鳩山和夫

角田眞平

丸山名政

賛成者略ス

● 第五

右ノ如ク質問書ヲ提出シタルヨリ日ヲ經ル一週間ヲ過クルモ政府ハ尙ホ答辯セズ是ヲ以テ十二月六日鳩山和夫氏ハ衆議院ニ於テ左ノ如ク演說シテ政府ノ答辯ヲ促カセリ

議院ニ於ケル鳩山和夫氏ノ答辯催促演説

本員ハ軍艦千島艦ト「らべんな」號トノ衝突事件ニ附イテ政府ニ質問書ヲ提出シテ置キマシタガ、未ダ回答ニ接シマセヌ、因テ催促ヲ政府ニスル、其趣意ヲ茲ニ述ベマスル、澤山此處ニ材料ヲ持ツテ居リマスルガ、長イコトハ言ハナイ、賢明ナル諸君、要點丈ヲ申上ゲタナラバ、ソレデ澤山ダラウト云フ考デス、軍艦千島艦ト「らべんな」號即チ彼阿會社持船ノ「らべんな」號ト衝突致シタコトカラ、我政府ハ横濱ニ於ケル英國領事廳ニ八十五萬圓ノ訴ヲ提起致シマシタ、是ニ附イテ彼阿會社ハ反訴ト致シマシテ十萬圓ノ請求ヲ日本政府ニ對シテ出シマシタ、然シテ其反訴ト云フ名義ヲ以テ、英國ノ會社デアアル彼阿會社ガ日本デハ或ハ日本政府ニ對シテ横濱ノ領事廳ニ於テ裁判ヲ請求スルコトガ出來ルヤ否ヤト云フコトガ問題トナリマシタ、此事件ニ附イテ法律上ノ問題ハ澤山アリマスルガ、夫等ヲ側ニ置イテ置キマシテ、法律上ノ問題以外ニアツテ、我政府ノ處置ノ其當ヲ得ヌト考ヘルコトガアリマスカラ質問シタ譯デアアルガ、其一ツハ此訴ニ於テ訴ノ筆記ヲ讀ンデ見マスルノニ如何ナル次第デアアルカ、日本天皇陛下ノ御名ガ現レテ居ルデアアル、天皇ノ御名ト云フモノハ嘗テ訴訟ノ原告若クハ被告トシテ日本ノ認庭ハ勿論其他ノ認庭ニアリマシテモ、天皇御自身ノ御名カ認庭ニ於テ争ヒノ一方トナラレタト云フコトハ嘗テ無イコトデアアルノデス、然ルニ此裁判事件ニ附イテノ筆記ヲ見マスルト、往々天皇即チ英語デるんべるる、をふ、ヒやばんと云フコトガ現レテ居ルノデ、是ハ政府ノ知ラザルコトデアツテ、日本政府即チ日本天皇ト云フ如クニ代理者丈ガ考ヲ附ケテ天皇ノ御名ヲ引出シタモノデアアルカ、或ハ其邊深ク氣ガ附カズシテ日本政府ノ代理者トナツタル所ノ者ハ英國人カークービ

氏デアアルカラ天皇御名ノ尊キコトヲモ知ラズシテ、妄ニ出シタモノカ知レマセヌガ、兎ニ角天皇ノ御名ガ争ノ一方即チ彼阿會社ノ被告人トシテ天皇陛下ノ御名ガ現レタノハ事實デアアル、其事柄ハ日本政府ノ代理者ガ横濱ノ領事廳ニ差出シマシタ所ノ答辯ノ中ニアルノデアアル、又日本ノ代理者ガ清國上海ニアル所ノ英國裁判所ニ於テ辯論シタ、其辯論ノ筆記ノ中ニモアルノデス、日本ノ政府ノ代理者ガ反訴ト云フモノヲ受クベカラズト致シマシタ其理由ノ一ツハ、斯ウナツテ居リマス、日本天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ侵スベカラザル、天皇本件ノ原告タリ故ニ之ニ對シテ反訴スベカラズ、尤モ是ハ英語デ述ベタノデアリマスカラ此通ニ翻譯スルノガ正當デアアルヤ否ヤハ分リマセヌガ、趣意ニ於テハ此通り即チ日本天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラザルモノデアアル、此御方ニ對シテ彼阿會社ガ訴ヲ起シタノデアアルカラ、此反訴ト云フモノハ受理スベカラズト云フノガ第一ノ理由ニナツテ居ル、第一デハナイ第三ノ理由トシテ防禦ノ方法ノ第三デアリマス、又第四トシテ出シタノハ「兩船衝突ノ地ハ日本ノ領海ナリ故ニ本件ヲ審判スルニハ日本法律ヲ以テセザルベカラズ然ルニ日本法律ハ天皇ニ對シテ起訴スルヲ許サズ依テ反訴ハ成立セズ」斯ウ云フ防禦ノ方法ヲ用ヒマシタ、ソコデ英國ノ裁判所ハ此防禦ノ方法ニ附イテ斯様ナコトヲ言フテ居ル「日本ノ法律ニ從フ時ハ日本ノ天皇ハ神聖デアアル侵スベカラザルモノデアアルト云フ其事柄ハ日本法律ニ精シキ所ノ穂積陳重君ノ意見ニ於テ明カデアアル、然シテ此衝突ノ場所ハ日本領海デアアルト云フコトニ附イテハ疑ガナイカラ則チ天皇ニ對シテ訴ヲ受理スベキモノデナイ」ト云フ判決ヲ致シマシタ、此反訴ニ就イテハ横濱デハ日本政府ハ勝ツタ、上海デハ負ケタト云フコトニナツテ居リマスガ、横濱ノ裁判所デ日本政府ガ勝ツタ其理

由ハ何處ニアルカト云フニ 天皇陛下デアルカラ勝ツタト云フ、反訴ト云フモノハ條約上
 許スベキモノデアルヤ否ヤト云フコトニ附イテハ、横濱ノ裁判所ハ許スベキモノデアル、
 日本政府ノ方ヲ負カシテ居ル、反訴ト云フモノハ——許スベキモノデアル、然ルニ此反訴
 ハ、天皇ニ對スル訴テアルカラ、横濱ノ裁判所ハ受理セヌト云フ判決ヲナシタノデアル、
 則チ日本政府ガ防禦ノ方法トシテ提出シマシタ理由ト、其判決トニ依ツテ見レバ 天皇陛
 下ノ 御名ト云フモノヲ日本政府ガ用ヒタト云フ丈ノ事實ハ明デアルト思フ、此事實カラ
 生ズル疑ハ、何故ニ我政府ハ恐レ多クモ 天皇陛下ノ御名ヲ認庭ニ持出シ、サウシテ其爭
 ノ一方トナシタカ、何故ニ我政府ハ英國領事裁判ノ如キ下等ナル裁判官ヲシテ我 天皇ニ
 對シテ裁判ヲ爲サシメタカ、我天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズト云フコトノ此 天皇ニ對
 シテ裁判ヲ爲ス所ノ權力ヲ有ツテ居ルモノハ、獨リ日本ノミナラズ宇宙間ニ 天皇陛下ニ
 對シ奉ツテ裁判ヲ爲ス 天皇陛下ノ申立ツル所ガ宜イトカ悪ルイトカ云フコトヲ爲ス如キ
 權力ヲ有ツテ居ルモノハ、宇宙間ニハナイノデアル、然ルニ我政府ハ横濱ノ領事ノ如キ者
 ヲシテ——領事裁判所ノ裁判官ヲシテ 天皇陛下ヲ爭者ノ一方トシテ、縱令其御方ヲシテ
 勝タシタニシテモ、一方トシテ裁判ヲ爲サシメタ、是ハ我々ガドウシテモ不問ニ附スベキ
 事柄デナイト考ヘルノデアル、我内閣大臣ノ如キハ、人民ニハ責任ガナイト云フ様ナコト
 ヲ言フ 天皇陛下ノミニ對シ奉ツテ責任ガアルト云フコトハ言フテ居ル、此人達ハ——此
 内閣ノ人達ハ 天皇ニ對シテ責任ガアルト自ラ言フテ居ル、而シテ私ノ承知シテアル事實
 デアレバ 天皇ノ御裁可ヲ得タ譯デモナク、濫ニ 天皇ノ御名ヲ裁判所ニ引出シタト云フ
 其責ニハ一ニハ 天皇ニ對シテ其責任ヲ負ハネバナラヌ、又二ニハ我 天皇ト云フ者ハ内

閣ノ 天皇デハナイ、日本人民ノ 天皇デアル、我々ノ天皇デアル、即チ此政府ノ所爲ト
 云フモノハ、一ニハ 天皇ニ對シテ責任ヲ帶ビ、又我々人民ニ對シテモ其責任ヲ負ハナケレバ
 ナラヌト考ヘルノデアル、日本ノ歴史ハ隨分長イコトデアアル、併ナガラ日本天皇陛下ノ
 御名ト云フモノガ裁判所ノ記録ニ現レタト云フコトハ今度ガ初デアアル、我内閣大臣等ハ隨
 分不當ナルコトヲ爲シタコトハ幾箇モアル、サリナガラ之ニ比較シタナラバ皆些細ナコト
 ニナツテ仕舞フノデアラウト思フ、此神聖ナル日本國、神聖ナル日本國ノ 天皇ノ御名ト
 云フモノヲ裁判所ノ記録ニ載セテ、裁判所ノ判事、然カモ外國ノ極ク下級ノ判事ヲシテ、
 此御方ニ對シテ裁判ヲ爲カシムルニ至ツタト云フコトハ、日本國ニ大ナル侮辱ヲ與ヘタ
 招イタ、其責ト云フモノハ、歸スル所ハ内閣全體ニアルト私ハ考ヘマス、此事件ハ千島
 艦カラ起ツタノデ、主務大臣ハ或ハ海軍大臣デアリマセウ、サリナガラ 天皇ノ 御名ヲ
 用ヒルト云フ如キ事柄ハ、海軍大臣一人ノ責ニ歸スル譯ノモノデナイ、内閣全體ニ其責ハ
 歸スルモノデアルト考ヘル、質問書ヲ發シマシテカラ、既ニ四五日間ニナリマスガ、政府
 ハ未ダ之ニ對シテ何等ノ答辯スル所ガナイ、私ハ必ズ期シテ居ル、政府ガ此答辯ヲ爲スト
 キニハ必ズ處決スル所ガアラウト思フノデアリマス、口丈ノ答辯、書面ノ上ノ答辯デ、是
 丈ノ罪ハ迫モ償フコトハ出來ルモノデナイノデアアル、此罪ヲ償フニハ行ヲ以テシナケレバ
 ナラナイト考ヘル、即チ答辯ノ後ル、所以デアルト考ヘル、合一ツ質問ノ趣意ガゴザイマ
 スガ、横濱ノ英國領事廳ニ於テハ其理由ハ免モ角モ反訴ハ受理スベキモノデナイト云フノ
 デ、之ニ就イテ彼阿會社ハ清國ニ在ル所ノ上海英國上等裁判所ニ控訴致シマシテ、我政府
 ハ此裁判所ニ代理者ヲ差出シテ答辯セシメタト云フ事實デアアル、遂ニ上海裁判所ノ判決ヲ

受クルニ至リマシタ、此裁決ハ諸君御承知ノ通ニ、彼等内海ヲ以テ日本領内ニアラスト云フ判決デアアル、其判決ノ正否ハ此處デ論ジマセヌ、私ノ賢問ノ趣意ハ何故ニ日本政府ハ清國ニ在ル所ノ英國裁判所ノ管轄權ヲ認めタカト、云フノデス條約ニ依ツテ見マスト、英國ト日本トノ條約、佛國ト日本トノ條約、米國ト日本トノ條約、其他歐羅巴亞米利加諸國ト日本トノ條約ノ文意ヲ點檢シテ見マスト、種々ノ條約ノ中、多少文意ハ違ウテ居リマスルガ、其歸スル所ハ英國人ガ被告ニナル場合ニハ英國ノ領事其裁判ヲ爲シ、佛國人ガ被告トナルトキハ佛國ノ領事其裁判ヲ爲シ、米國人ガ被告トナルトキハ米國ノ領事其裁判ヲ爲シ、日本人ガ被告トナルトキニハ日本長官若クハ司人ト云フ字ヲ使ツテアル——司ルト云フ字ニ人ト云フ字、ソレデ其裁判ヲ爲ス、是ニ由ツテ見ルト歐羅巴亞米利加人ガ被告デアルト、其所屬國領事ガ裁判權ヲ有スルト云フコトハ條約ノ上ニ於テ明デアルト思フ、即チ我政府ハ此條約ニ據ツテ日本國ニ屬スル所ノ固有ノ裁判權ヲ、或ル事件ニ限ツテ領事ニ之ヲ委任シタモノデアアル、日本政府ハ夫丈ノ讓與ヲ爲シタノデアアル、然ルニ清國ニ在ル所ノ英國上等裁判所ハ是レ何者ゾ、斯様な者ニ日本政府ガ裁判權ヲ割イテ與ヘタコトハ、嘗テ條約上ナイノデアアル、日本ニ於テ發生シタル所ノ事柄ニ支那ニ在ル所ノ英國裁判所ガ管轄權ヲ有スルト云フコトハ不思議デハナイカ、支那ニ在ル所ノ英國裁判所ハドウ云フ所カラシテ、斯様な事件ニ就イテ管轄權ヲ有ツ様ニナツタカ、夫ニハ少シ謂ハレガアル、英國ノ樞密院令ニ、諸君ノ中ニハ始テ御聽キニナルデアラウト思ヒマスコトガアリマス、日本帝國支那帝國ハ管轄權ノ目的ノタメニハ英國ノ屬國ト看做スベシト云フコトガアリマス、即チ屬國ト譯シマスカ、或ハ何ト譯シテ宜イカ、でべんでんし——即チ濠洲ノ如キしとに——

如キ、其樞密院令ノ中ニ管轄權ヲ定ムル目的ノタメニハ、日本モ支那モ英國ノ屬國デアアル、即チ濠洲モ同ジデアアル、しとに——モ同ジデアアル、斯ウ云フコトヲ樞密院令デ極メテ來タノデアアル、上海ノ上等裁判所ガ管轄權ヲ有スルト云フノハ、全ク是ニ原因スルノデアアル、諸君、此事柄ガ英國人丈ソ間ニ起ツタ問題デアルナラバ、我政府ノ關係スル所デハナイ、即チ英國人トノ間ニ起ツタ所ノ訴訟デ、其訴訟ガ支那ニ在ル所ノ英國上等裁判所ノ管轄ニ歸スルト云フコトハ我政府ニ或ハ見テ居ツテモ宜シイコトデアリマセウ、併ナガラサウデナクシテ一方ハ彼阿會社デアアル、一方ハ、天皇陛下デアアル、此訴ニ附イテ支那ニ在ル所ノ英國裁判所ガ管轄權ヲ特ツト云フコトハ我々ハ條約ヲ以テ之ヲ許セバ兎モ角モ、日本政府ガ承諾ヲ表シタナラバ仕方ガナイ、併ナガラ此條約ノ中嘗テ左様な承諾ヲ日本政府ガ爲シタコトハナイノデアアル、然ルニ日本政府ハ彼阿會社カラ控訴シタル場合ニ於テ、此裁判所へ代理者ヲ出シテ答辯セシメタノデアアル、即チ管轄權ヲ認めタノデアアル、條約ノ事柄以外ニ日本政府ハ一ツノ管轄權ヲ認めタト云フコトニナルノデアアル、從來ノ此條約ノ解釋、條約ノ實施ニ附イテハ世間既ニ輿論ガアリマス、從來ハ條約ヲ唯守ルコトガ出來ズシテ、條約以外ニ日本政府ハ種々様々ノ條約ヲ爲シテ居ル、其輿論ハ既ニ高イ、誰モ之ニ異議ヲ云フモノハナイ、其矢先ニ政府ハ又一ツ斯様なモノヲ加ヘテ、裁判權管轄權ト云フ如キ其影響ノ及ブ所非常ニ大ナルモメラ、從來ノ既ニ外國人ニ條約以外ニ割與シタモノ、外ニ、尙ホ是丈ノモノヲ加ヘタト云フコトニナルノデアアル、即チ第二ノ質問ノ要領ノ出ル譯デ、何故ニ日本政府ハ此清國ニアル英國上等裁判所ノ管轄權ヲ認めタカト斯ウ言フノデアアル、其間ニ附イテハ私ハ政府ニ極ク公平ナ答ヲシテ貰ヒタイ、此間ニ附イテハ政府ハ即チ

今ノ内閣諸公ハ自分達ノコトノミヲ考ヘズシテ、日本國ト云フモノヲ目ノ前ニ置イテ、日本ノ將來ヲ目ノ前ニ置イテ、答ヲシテ貫ヒタイノデアアル、何トナレバ既ニ是ハ誤デアルト云フコトデアラナラバ、直ニ政府ハ過ヲ改メネバナラヌ、此過ガ過デアルト云フコトハ、既ニ私ノ見ル所明瞭デアアルニ拘ラス、此過ノ上ニモウ一ツ過ヲ加ヘテ政府ノ處置ト云フモノハ宜シイノデアアルト言ツテ、之ヲ辯護スルト云フコトニナリマスルト、日本政府ハ公ナル文書ヲ以テ英國ノ裁判管轄權ヲ認ムルト云フコトニナルノデアアル、諸君、此政府ガ自ラ過ツタト云フコトヲ承知シテ、政府ノシタコトハ惡ルイト云フコトニスレバ、ドウ云フ結果ニナルカト云フニ、今ノ内閣諸大臣ハ引イテ仕舞フ、即チモツト譯ノ分ツタ人、尙ホ條約ヲ守ルコトヲ知ツテ居ル所ノ人ガ内閣ニ這入ル、其時ハ伊藤内閣ハ何モ知ラズス様ナコトヲ一變シタノデアアル、ソシテ惡慣例ヲ我々ハ守ル責任ハナイト云フテ仕舞フデス、詰リ私ガ内閣大臣ニナルトカ、總理大臣ニナルトキハ伊藤ナドノシタコトノ中ニハ間違ガ澤山アルカラ、ソシテ前例ニ引カレテハ困リマスト云フテ仕舞フニ過ギナイ、然ルニ此政府ガ自分ノ過ヲ知ツテ、尙ホ其過ヲ遂グルガタメニ自分ノ職ヲ辭サズシテ、尙ホズツト續イテ行クトキニハ日本政府ハ公ノ文書ヲ以テ此條約以外ノ管轄權ヲ認メタト云フコトニナリマスカラ、私ハ伊藤サン其他ガ唯自分達一己ノ身ノ上ノコトヲ考ヘズシテ、條約ト日本政府ノ將來、日本國ト云フモノヲ目ノ前ニ置イテ、而シテ此問ニ答ヘラレントラ望ムノデアアル、餘リ返事ガ後レマスガラ催促ヲシタ譯デアリマス

第六

然ルニ政府ハ去ル十二月六日ヲ以テ至テ冷々淡々タル答辯ヲ爲セリ今之ヲ左ニ示ス

衆議院議員鳩山和夫君外二名提出軍艦千島衝突損害要償事件ニ關スル質問ニ對スル答辯書

- 一、軍艦千島衝突損害要償事件ノ訴狀ニ掲ケタル原告ノ名稱ハ帝國日本政府ノ名稱ヲ用ヒタルモノナリ
- 二、上海ノ英國上等裁判所へ出庭答辯ヲ爲シタルハ先例ニ據リタルモノナリ

明治廿六年十二月六日

海軍大臣 伯爵西郷從道

第七

右一片ノ答辯タルヤ質問者ハ勿論議院ハ固ヨリ世間何人ト雖モ其要領ヲ得タリト爲スモノ莫シ乃チ前質問者ハ再ヒ左ノ質問書ヲ提出スルコト爲セリ
鳩山氏等ノ再質問書

本年十一月廿八日本員等ヨリ質問シ十二月六日政府ヨリ答辯アリタル軍艦千島號英船ラヴエンナ號ト衝突ニ起因スル訴訟事件ニ關シ更ニ左記ノ事項ニ付政府ノ答辯ヲ求ム
一、右訴訟事件ノ進行中政府ノ代理者ハ御名ヲ以テ反訴ヲ拒ムノ理由トナシ又在橫濱英國領事裁判所ハ

御名ニ對シテ訴ヲ提起スル能ハストノ理由ヲ以テ反訴ヲ棄却シタルハ掩フベカラサルノ事實ナリ然ラバ即チ政府ハ訴狀ニハ帝國日本政府ノ名義ヲ以テシタルモ其進行中御名ヲ用ヒタルモノナリ依テ更ニ何故ニ政府ハ御名ヲ用ヒタルカ理由ノ説明ヲ求ム

二、第一項ノ質問ニ對スル政府ノ答辯ニシテ政府ハ訴狀ニ帝國日本政府ノ名義ヲ以テ訴ヲ提起シタル者ナルガ故ニ其以後訴訟ノ進行中ニ係ルコトハ政府ノ知ル所ニ非ストノ趣旨ナルニ於テハ政府ハ何故ニ其自ラ命シタル代理者ノ行爲ニツキ其責ニ任セサルヲ得ベシトナスヤ其理由ノ説明ヲ求ム

三、政府ノ答辯ニ於テ先例ニヨリタリ云々トアルモ其先例ナルモノハ何事ヲ指定スルモノナルヤ分明ナラス依テ其事件ノ訴名、當事者、訴訟提起ノ年月日判決ノ年月日争點ノ揭示ヲ求ム

四、政府ハ其先例トスル處ノ者アル上ハ其當否如何ニ拘ハラズ之ヲ遵奉スルノ義務アリト認メタリヤ又ハ其先例ナルモノヲ是認シテ之ニ據リタルモノナルヤ

五、政府ハ上海英國裁判所ノ判決ニ服従スルノ意ナルヤ將又之ニ對シ上訴スルノ決心ナルヤ

右議院法第四十八條ニ依リ提出ス

明治二十六年十二月十二日

質問者

鳩山和夫
丸山名政

角田眞平

賛成者(署)

● 第八

而シテ鳩山氏ハ十二月十三日ヲ以テ衆議院ニ於テ更ニ右再質問ノ理由ヲ説明セリ
再質問提出ノ理由説明

本員並ニ角田眞平君丸山君三名ハ先ニ千島艦トらべんな號トノ衝突事件カラ起ル所ノ訴訟ニ就イテ政府ニ質問ヲ致シマシタ是ニ對スル答辯ハ諸君既ニ御承知デアアル然ルニ彼ノ件ニ附イテハ未タ要領ヲ得サル所カアリマスルカラ尙ホ本日質問ヲ提出シタル所以デアアル其條項ハ左ノ如シ——ト通り讀ミマス

(此ノ時質問書ヲ朗讀セリ)

條項ニ書キマシタノハ是丈デアリマスル、尙ホ口頭ヲ以テ此趣意ヲ少シ敷衍シテ置キマシテ政府ノ答辯ノアルトキニ其答辯ニ附イテ諸君ノ御考モアルデアラウト思ヒマスカラ、其便ニ供スル爲メニ聊カ口頭ヲ以テ之ヲ敷衍シテ置キマスル、御承知ノ通ニ本員等ノ質問ハ——前回本員等ノ質問ハ「政府ハ何故ニ此訴狀ニ就イテ、御名ヲ用キタルヤ」ト云フ問デアアル、然ルニ政府ハ是ニ對シテ訴狀ニ帝國日本政府ノ名ヲ用キタリ」是丈ノ答辯ヲシテアル、而シテ本員等ノ質問ト云フモノハ訴狀ニ用キテアル所ノ名義ヲ問フタノデハナクシテ、此訴訟事件ニ附イテ、御名ガ反訴ヲ拒ム理由トナリ、又ソレガ判決ノ理由トナツテ居ル、ソレハドウ云フモノデアアルカト云フ問デアアルンデス、而シテ事實ト致シマシテハ此訴訟ノ進行中ニ政府ノ代理者ガ、御名ヲ以テ此反訴ヲ拒ム理由トナシタト云フコトハ明カデアアル、其理由ガ判決ノ理由ニナツテ居ルト云フコトモ事實デアアルンデス、斯様ナ事實デアアル以上ハ政府ガ、御名ヲ用キタリト云フ事實ハ如何ニ蔽フトモ是ハ蔽フベカラサルノ事實デアアル、即チ政府ハ何故ニ、御名ニ對シテ此汚辱ヲ加ヘタリヤト云フ、此質問ニ是非トモ答ヘナケレバナラヌ地位ニナツテ居ルノデアアル、即チ其答辯ヲ求ムルノデアリマス、第二ハ政府ノ答辯ガ斯様ナル場合ニ於テハト云フ、一ノ假定説ノ質問デアアル、何故ニ本員等カ此

問ヲ呈スルト云フノニ徒ニ書面ヲ以テ政府ト議院トノ間ニ質問答辯ト云ツテ御互ニコチラカラ責メル、向フカラ逃ルト云フヤウナコトヲシテ居ル間ニ時ガ費エテハナリマセヌカラ、政府ノ答辯ト云フモノハ先ヅ斯様ナモノデアアルカ知ラヌト豫期シテ之ヲ問フタノデアアル、即チ政府ハ帝國日本政府ノ名義ヲ以テ訴ヘタノデアアル、其他ハ代理人ニ委託シテアッタノデアアルカラ、我々ハ知ラヌト斯ウ云フ答辯ヲ爲スカ知ラヌ、其時ニハ若シ政府ガ斯様ナ答辯ヲ爲スナラバ何故ニ政府ハ自分自ラガ命シタ所ノ代理人ノ行爲ニ附イテ其責ニ任ゼザルヲ得ルカ、其理由ヲ求ムルノデアアル、諸君ガ御承知ノ通ニ横濱ニ於テ本件ノ判決ニナリマシタノハ本年ノ六月ノ末デアアル、此判決ノ理由ノ中ニハ先刻申シタ通りニ御名ニ對シテハ訴ヲナスコトガ出來ヌト云フ日本ノ法律デアアルカラ、此反訴ヲ棄却スルト云フコトガ書イテアル、政府ハ此判決ハ見タデアラウト思フノデアアル、何トナレハ縱令最初ニ代理人ニ訴訟委託スルトキニハ、帝國日本政府ノ名義ヲ以テ訴フベシト命シタト假ニ定メマシテモ御名ガ判決ノ理由ノ中ニ顯ハレテ來ル以上ハ其代理者ト云フモノガ御名ヲ用キタリト云フコトハ其時ニ政府ガ知ツテ居ラナケレバナラヌ、尙ホ其横濱ノ裁判ニ對シテ彼阿會社カテ答辯セシムルヤ否ヤト云フコトニ附イテハ又考ヘタニ相違ナイ、其時ニハ必ズ政府ハ其判決文ハ見タデアリマセウ、其判決文ヲ見タナラバ御名ガ其中ニアルト云フコトハ必ズ政府ガ知ツタデアリマセウ、即チ代理者ノ爲シタコトデアアルカラ、政府ハ知ラヌト云フ答辯ヲ今日政府ガナストモ其以前ニ代理者ガ御名ヲ用キタト云フコトハ政府ハ承知シテ居ルノデアアル、政府ハ此質問ニ逢フテ始メテはナレハ知ラナカッタガ、代理者達ガ御

名ヲ徒ラニ用キタカト云フテ事實ヲ知ッタノデハナイノデアアル、判決ノアツタ當時ニ判決文ヲ見レバ、政府ハ之ヲ知り得ルノデアアル、即チ政府ハ其時ニ知ッタノデアアル、又英吉利ノ裁判所ニ答辯ノタメニ代理者ヲ派出スルトキニハ、尙政府ハ此事實ヲ知ッタノデアアル、然ラバ其當時ニ政府ハ何ヲシテ居ッタノデアアル、横濱裁判所ノ判決文ニ御名ガ現レタト云フコトハ、誰ガ見テモ黙ッテ居ルコトガ出來ルモノデナイ、而シテ當局者タル政府ガ之ヲ見テサウシテ今日此質問ニ出逢フマデ、何モ知ラズニ居ッタト云フコトハナカラウト思フノデアアル、此質問ノ因ッテ起ル譯デアアルデス——第三ノ質問ハ別ニ申上ゲル様ノ必要モナイ——第四デゴデゴザイマス、即チ第四ハ英國ノ上海ニ在ル所ノ裁判所ノ管轄權ヲ日本政府ガ認メタルヤト云フ問ニ對シテ、政府ハ前例ニ依レルモノナリト云フ簡單ナ答辯ヲ爲シタノデアアル、此先例ナルモノハ果シテ遵奉スベキ所ノ先例デアアルヤ否ヤ、是ガ質問スベキ所ノ廉デアアル、條約ヲ締結シテ以來今日ニ至ルマデノ間多クノ先例ト云フモノハ皆惡先例デアアル、一ツ先例ガアルナラバ必ズ其先例通ニナサネバナラヌト云フコトデアアルデアアルナラバ、今ノ條約ト云フモノハ殆ド效ヲ爲サナイノデアアル、極ク簡單ナル例デ私ノ記憶シテ居ル先例ヲ——惡先例ヲ一ツ申シマスガ、條約ノ上ニアッテハ日本政府ハ歐羅巴亞米利加ノ人版權ヲ保護スルト云フ約束ヲシタコトハナイ、彼等ノ商標ヲ保護スルト云フ約束ヲシタコトハナイ、然ルニ日本人ガ米國デ出版シタ所ノ讀本ヲ翻刻シテ之ヲ賣捌イタ、其時ニ米國ノ政府ハ日本人ガ亞米利加人ノ版權ヲ侵害スルト云フテ外、交談判ヲ始メテ、遂ニ外務省ハ之ヲ内務省ニ轉ジ内務省ニ於テドウ云フ處分ヲシタカ、兎ニ角日本人ノ翻刻ヲ止メタト云フ先例ガアル、英國人ガ石鹼ノ上ニ附ケテアル所ノ商標ト云フモノヲ持ッテ居ル、

其商標ヲ日本人ガ偽造シテ日本出來ノ石鹼ニ其商標ヲ附ケテ賣捌イタ、其時ニ英國政府ハ又外務省ニ迫テ外務省ハ之ヲ内務省ニ移シテドウトカ處分シテ矢張日本人ノ商標ト云フモノヲヨサセテ仕舞フタ、獨逸人ガ或ル葡萄酒ニ附ケテ居ル所ノ商標ト云フモノヲ日本人ガ摸造シテ之ヲ日本ノ葡萄酒ニ附ケタ、其時ニドウシタカ、又獨逸カラ外務省ニ外交談判ヲ開イテトウ、日本人ヲシテ止メサセタ、其通リノ事實ガ又再ビ起ツテ來タ、亞米利加ノ政府又再ビ版權ニ附イテ小言ヲ云フ、英吉利ノ政府又小言ヲ云フ、獨逸ノ政府又小言ヲ云フ、其時ニ日本政府ハ何ト之ヲ受ケタカ、其時ハ二回目デアッタカ三回目デアッタカ、前ニ先例ガアッタ、同ジ先例ガ再ビ起ツテ來タトキニ、政府ハ從來ノ先例ハ遵奉スルノ義務ナシ、即チ米國人ノ版權ハ日本政府ノ與ヘタ版權ニ非ラズ、英國人ハ商標亦獨逸人ノ商標ハ日本ノ農商務省ニ登録シテナイカラ保護セヌ、從來ノ慣例ハ我々ハ守ラヌト云フ答辯ヲシテ、從來ノ慣例ハ一時ニ掃除シテ仕舞ッタト云フ事實ガアルノデアリマス、ソレハ大隈伯ノ時代デ拙者ガ外務省ニ在ル時デアッタ、斯ウ云フ譯デアアルノデスカラ、先例必シモ守ルベキモノデアラナラバ、現行條約ノ外ニハ日本政府ハ幾ツモ讓與ヲシテ居ルカラ、皆ソレガ條約同一ノ効力ヲ有スルコトニナツテ來ル、法律ニ違反シテモ條約ニ同一ノ効力ヲ有スルコトニナツテ來ル、先例ガアルナラバ其先例ノ通リニ守ラナケレハナラヌト云フコトデアアル、今日ノ我々ト云フモノハ維新以來ノ政府ノ失策ノ後ニ立ツテ居ルカジ、之ヲ悉ク遵奉シナケレバナラヌ、之ヲ改良スルコトハ出來ヌト云フコトニナルノデアアルンデス左様ナ道理ガアル譯ノモノデハナイ、ソレ故ニ先例ガアルナラバ其先例ト云フモノハ果シテ遵奉スベキ道理ニ違ヒ、條約ニ違フタ先例デアアルカ否ヤハ確メナケレバナリマセ

ヌ、若シ條理ニ背キ條約ニ背イタ先例ナラバ無論廢棄シテ構ハナイ、本件ノ如キハ政府ハ先例アリト云フ、而シテ其先例ハ何デアアルカト云フコトハ指定サレナイ、サリナガラ如何ナル先例ガアリマシテモ、私ハ此先例ト云フモノハ惡先例デアアルト考ヘル、政府ニ其先例ノ如何ノ質問ハ求メテアルガ、答ノ無イ中カラ政府ガ先例ナリト云フ所ノモノハ必ズ條理ニ背イタ先例デアアル、條約ニ背イタ先例デアアルト斷言スルコトガ出來ルト思フデス、何トナレバ此日本ガ領事裁判ト云フコトニ附イテハ條約ノ上一ノ讓與ヲ爲シテ居ル、併ナガラ日本ニ無イ所ノ支那ニ在ル所ノ英國ノ樞密院令ニ據ツテ生レテ來タ所ノ裁判所ノ管轄權ガ日本ニ及ブト云フコトハ決シテナイ筈デアアル、其事ハ條約上明文ヲ以テ許セバ兎モ角モ、條約上明文ノナイ限ハ清國ニ在ル所ノ英國裁判所、又ハ英國ニ在ル所ノ英國裁判所ガ日本ニ對シテ裁判管轄權ヲ持ツコトハ道理ニ於テナイ、之ヲ一ツ許シタナラバ、日本ト云フ所ニハ英國ノ裁判權モ及ブデアラウ、露西亞ノ裁判權モ及ブデアラウ、佛蘭西ノ裁判權モ及ブデアラウ、亞米利加ノ裁判權モ及ブデアラウ、日本ニ世界中ノ條約ノアル國ノ裁判權ガ皆日本ニ及ンデ來ル、斯様ニ日本ノ領事以外ニアル所ノ裁判權ガ日本ニ及ブ事實ガアツテ、ソレデ日本ガ尙ホ獨立國ト稱シ得ルモノデアマリスカ。司法行政立法其中ノ一ニナツテ居ル所ノ日本ノ司法權、ソレヲ條約ニ於テ領事丈ニハ許シテアルカラ仕方ガナイ、サリナガラ領事裁判ノ外ノ尙ホ倫敦ニ在ル裁判所、巴里ニアル裁判所、聖彼得堡ニアル裁判所、華盛頓ニアル裁判所、其他諸所ニアル裁判所ガ遠ク手ヲ延バシテ日本ニ管轄權ヲ及ボスト云フコトガアツテ、此日本ガ其管轄權ノ下ニ服従スルト云フコトデアツテ、ソレデ尙ホ日本ガ獨立國デアリマスカ、政府ノ解釋ニシテ正シイモノデアアルナラバ、サウ云フコトニナツテ

仕舞フノデアアル、此解釋ト云フモノハ我國權上重大ナル問題デアアルノデアアル、斯ウ云フ次第デアアルカラ、即チ第四ノ質問ガ起ツタ理由デアアル、終ニ斯ウ云フコトヲ一言シテ置カウト思フ、私ハ此問題ニ附キマシテハ政府カラ満足ナル答辯ヲ得ンコトヲ望ムノデアアル、此議員諸君モ政府ガ満足ニ答ヘタト云フコトノ場合ニナリマシタナラバ、大ニ喜バル、デアラウ、私モ大ニ喜ブノデアアル、日本國民全體ガ政府ガ満足ノ答辯ヲ爲セバ喜ブノデアアル、何トナレバ私其外今ノ内閣ニ不平ナル人々ハ此内閣ノ倒レルノヲ望ムデアリマセウ、政府ガ満足ナル答辯ヲ爲スコトガ出來ネバ、政府ハ其責ニ任ジナケレバナラス、併シ政府ガ満足ナル答辯ヲ爲スコトガ出來ルナラバ、政府ハ其位地ヲ保ツコトガ出來ルノデアアル、則チ内閣ニ對シテ不平ナル人々ハ政府ガ不満足ナル答辯ヲ爲スコトヲ或ハ希望スルカモ知レマセヌ、ケレドモ日本帝國ト云フモノヲ目ノ前ニ置イテ則チ些々タル黨派ノ考ヲ傍ニ措イテ此問題ヲ講究スルトキニハ、本員等ノ質問ニ對シテ政府ガ本員等モ満足シ、諸君ガ満足シ、日本帝國ノ人民ガ満足スル所ノ答辯ヲ與ヘラレンコトヲ希望スルノデアアル、而シテ其答辯ガ一行ヤ二行ノ答辯デ出來ルモノデナイト考ヘマスカラ、此事ニ附イテ其責ニ任ゼナケレバナラス所ノ伊藤總理始メ各大臣出席シテ口頭ヲ以テ答辯セラル、コトヲ望ムノデアリマス

● 第九

此ノ如ク歩一步進ミ來ルニ及テハ政府ト雖モ最早十分ノ答辯ヲ爲サル可ラサルニ至レリ然レ共復タ單ニ一片ノ文書ヲ以テ答辯スルニ止マラハ終ニ其要領ヲ得ルヲ難シ要領ヲ得ルヲ難カラハ質問者ハ勿論議院ニ於テモ如何ソ之ヲ打チ棄テ置カム然ラハ則チ益々事ノ煩ヲ加フルノミニテ終ニ効ナキニ至ラム長谷場代議士ノ緊急動議アル亦止ム可カラサルナリ而シテ全院一致異議ナク之ヲ可決シタルハ以テ大勢ノ歸スル所ヲ知ル可シ

長谷場純孝氏ノ緊急動議

● 第十

千島艦事件ニ關スル質問ニ對シ三日間ヲ期シ閣臣悉ク出院シ口頭ヲ以テ答辯セムヲ求ム然ルニ政府ノ處置スル所ハ如何即チ十二月十六日ヲ以テ左ノ履牒ヲ爲シ以テ議院ノ請求ヲ拒絕セリ

政府ノ履牒

二十六年十二月十五日ノ通牒ニ於テ貴院ハ國務大臣ノ出席ヲ請求セラレタリ國務大臣ハ何時ニテモ各議院ニ出席ノ權ヲ有スルカ故ニ其出席ノ爲ニ特ニ貴院ノ請求ヲ煩ハスヲ要セス此段履牒ニ及ヒ候也

明治二十六年十二月十六日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文

衆議院議長楠本正隆殿

● 第十一

是ニ於テカ議院ハ大ニ激昂シ黨ノ何タルヲ問ハス主義ノ如何ニ拘ハラス各派各黨打テ一丸トナリ十二月十九日ヲ以テ千島艦事件ニ關スル上奏案ヲ提出セントシタルハ實ニ勢ノ止ム可カラサルニ出テタルモノニシテ臣子ノ分當ニ然ラサル可カラサル所タリ、然レ共不幸ニシテ忽然停會ノ命アリテ又其志ヲ遂クル能ハサルニ至リタルハ遺憾至極ト謂フヘシ唯タ議院意向ノ何タルヲ示サムカ爲メ上奏案文ヲ左ニ示ス

上奏案文

衆議院議長臣某本院ノ決議ヲ具シ謹ミ奏ス

陛下登極ノ初メ汎ク宇内ノ形勢ニ察シ大ニ國是ヲ定メ國威ヲ四方ニ宣揚シ天下ヲ富岳ノ安キニ置カンコトヲ誓ハセ賜フ臣等ノ億兆ヲ志念一ニ

聖旨ヲ奉體シ以テ其分責ヲ盡シ

隆恩ニ奉答センコトヲ期セサルハナシ然ルニ本年我軍艦千島號ト英國人民所有ノ一商船ト衝突ノ事起ルヤ政府ハ政府ノ名ヲ以テ之ヲ在橫濱英國領事廳ニ出訴シ又在清國上海英國裁判所ノ招喚ニ應シ又政府ハ其代理人ヲシテ橫濱領事廳ニ於ケル質問ニ答フルニ

大御名ヲ以テセシメ終ニ英國判官ヲシテ

至尊ヲ外國一商民ト伍シ其判決ヲ爲サシムルニ至レリ臣等謹ミ案スルニ英國人民ハ我人民ト相對シタル民事上刑事上ノ被告ト爲ルトキニ限リ其自國ノ裁判ヲ受クルコトヲ得ルノ特約アリト雖トモ其特約ナキモノ即チ今般ノ事件ノ如キハ帝國ノ主權ニ存スルコト萬國普通ノ條理ナリ故ニ政府ノ千島號ニ關スル措置ハ條約ノ明文ニ由ラス正當ノ條理ニ基カス叨リニ帝國ヲ舉テ英國ノ主權ノ下ニ屈從セシメタルモノニシテ實ニ千古ノ失體ナリ陛下中興ノ

勅旨ヲ空フシ各國ノ凌侮ヲ招クユレヨリ甚シキハナシ而シテ内閣大臣等姑息苟安恬トシテ願ミス其重責ニ負クヤ大ナリ臣等

震念ヲ煩ハシ奉ルニ忍ヒスト雖トモ事全ク帝國ノ大體ニ關シ已ムヲ得ヘキニアラス臣某

誠恐誠惶謹ミ奏ス

理由

帝室ヲ汚瀆シ國權ヲ毀傷シタル國家至大ノ事件ナルヲ以テ已ムナク
上奏スルニ至ル是レ本案ヲ提出スル所以也
右成規ニ據リ提出候也

明治廿六年十二月十九日

提出者

鳩山和夫

柴田常

神輿知

小幡田繁

林樟雄

噫乎同胞四千萬人誰カ神州ノ國土ニ生レサル誰カ日本ノ榮穀ヲ食ハサル誰カ皇澤ニ浴セサル誰カ皇室ニ忠ナラサル自由黨ト謂フ勿レ改進黨ト謂フ勿レ雜居派ト謂フ勿レ非雜居派ト謂フ勿レ豈ニ又タ藩閥黨ト非藩閥黨ト問フノ暇アラムヤ苟モ三千年來一系統下ノ至尊ニ臣タルモノ此主權ノ消長ニ關シ此國體ノ汚隆ニ繫ル一大問題ニ付キ蹶起勵瘁之カ回復ヲ計リ之カ洗雪ニ努メサル可カラサルハ論ナキ耳萬一此事ヲ以テ黨派問題ト冷視シテ得々タル如キ者アラハ我輩之ヲ斥ケテ至尊ノ臣子ニ非ストセム

千島艦事件畢

国立国会図書館

登三小部米名村佐高を云ふ○本米名一田地
出ん由は遠く流るる石川村佐高米名長男

九段四ら ○左之短小松
○十二りヤセリ噴し川村助七十三ころ漢し ○十二り元を噴し

○本堂と寺 本谷之西とて生之基をトカるハ去市所り之所以
ニリカクリト云々○米名身津母の詞之共案ハル也

相クナニ内ありニ十二七 彦志

住寺只今又逢し身之番代ナ知

8.527

發行人兼印刷人 久世久
編輯人 福良虎雄
發行所 報知社
東京京橋區三十間堀三丁目十番地